

## チベット訳『梵天所問経』—和訳と訳注(4)

五島 清隆

### 1 はじめに

本稿は、五島 [2009][2010][2011] の続編であり、全6巻のうちの第4巻の和訳と訳注である。校合に用いた写本大蔵経 (B: パタン, K: 河口慧海将来本, L: ロンドン・シェルカル, Ph: プタク, T: トク・パレス) と版本大蔵経 (C: チョーネ, D: デルゲ, H: ラサ, N: ナルトン, P: 北京) の詳細に関しては、五島 [2003][2009] を参照願いたい<sup>1</sup>。

この第4巻では、質問者としてサマターヴィハーリンが、その応答者としてマンジュシュリーが、それぞれ新たに登場する。それまでヴィシェーシャチンティンの応答者であったジャーリニープラバは姿を消し、ヴィシェーシャチンティンとサマターヴィハーリンが、主要な質問者となる。

内容的には、次の4点が注目される。

#### (1) 菩薩の定義

本経 XIX-1 で、世尊が自ら菩薩のあり方を規定し、XIX-2 では、それを受けて32人の菩薩が、それぞれ自らの名に関連して菩薩のあり方を示している。菩薩のあり方は、様々な大乘經典において解説され、定義されているが、このようにまとめて示されているのは珍しい<sup>2</sup>。そのせいか、『大智度論』では、「菩薩の家」に関連して「菩薩」のあり方を解説する中の多くを、世尊とこれら32人の菩薩による解説の抜粋・要約で示している。また、世尊による「菩薩は正定・不定の衆生のためにでなく、邪定の衆生のために、邪定の衆生への悲心から、彼らのために悟りへの誓願をなす」という規定は、「菩薩の誓願」の変遷史の観点からも重要であろう。

#### (2) 「自我の自性=仏陀の自性」「自我=涅槃」「不得生死不得涅槃」

---

<sup>1</sup> このほか、本稿で用いる符号、記号、諸形式などについても前稿までのそれらに準じている ([2009] 142-143 頁参照)。なお、脚注番号が指示する箇所が長い場合、その範囲を明確に示すために、例えば (1) ..., ... (1) のように表記していたが、[2011] 以降では (1) →, ← (1) としている。この番号は、当該範囲の最後にくるべき番号で示される。

<sup>2</sup> たとえば『維摩経』でも32人の菩薩が登場してそれぞれの見解をのべるが、それは「入不二法門」に関してである (ch.8)。

「自我(アートマン)」は、大乘経典において、空・不可得なものとして、しばしば、涅槃や仏陀の同義語としてあげられる。たとえば、『八千頌般若経』では、一切法が依拠するものとして、虚空・空性・夢・涅槃等が「自我」の語と共に用いられている<sup>3</sup>。また、たとえば『七百頌般若経』では、言語化できず知覚の対象とはならない非存在のものとして「仏陀・如来」と同義語とされている<sup>4</sup>。ここに見られる「自我(アートマン)」は、あくまで「涅槃」や「仏陀」の不可得性を説明するための、いわば「喩例」として用いられているにすぎず、両者を等価なものとしているわけではない。本経 XX-1 において、「自我の自性は仏の自性である」とか「自我を観ることは法を観ることであり、法を見ることによって如来を見る」とあるのも、一見すると、「自我」と「仏陀・如来」とを等価なものとして捉えているように見えるが、「たとえば、黄金を見分けるのが巧みな者が、悪しきものを見分ける知によって良きものを見分ける知が決定するように、ちょうどそのように、自我を見ることによって知恵を見るのが清浄になる」、さらには「自我とは、完全に非存在であり、完成されないものです。そのように決定されていること、それが自我を見ることです」と説明されているように、否定すべき「自我(アートマン)」の真実の姿を見抜く知恵を養うことを強調していると考えべきだろう。「アートマン」を「真実(\*tathatā, tattva)」とし、その点で「アートマン=仏陀」とする『大乘涅槃経』<sup>5</sup>との距離は大きいと言えよう。

同じ XX-1 に「自我と涅槃とは等しく、これは不二であり、分けられないものです」とあるのも、上のような解釈を前提としていると見ていいだろう。XX-2 の「如来は輪廻を認識の対象とせず、涅槃も認識の対象とはしません(如来不得生死不得涅槃)」<sup>6</sup>というのが本経の基本的な考え方である。対立的な事項・概念を不二・無差別と表現するのが、本経の特徴であるが、いずれも「概念による言語習慣」に過ぎないからである。

### (3) 「デーヴァダッタの言葉=如来の言葉」

XXI-1 において、マンジュシュリーは「デーヴァダッタによって語られた言葉と、如来によって語られた言葉と、その二つの言葉には区別がありません。それはなぜかといえば、すべての言葉は如来の言葉だからです。すべての言葉は真如を出ることはありません」と言う。これは、『ディーガニカーヤ』や『アングッタラニカーヤ』等に見られる「聖人語」「非聖人語」の対比的区別を前提として、その区別を否定する表現であろう。経では、直後で、<すべての言葉は文字

<sup>3</sup> Asp 148.30-149.7.

<sup>4</sup> Ssp: 「大徳シャーラッドヴァティーブトラよ、アートマンというのは、仏陀の同義語なのです。大徳シャーラッドヴァティーブトラよ、アートマンが、まったく存在せず、知覚されないように、仏陀も、まったく存在せず、知覚されません。大徳シャーラッドヴァティーブトラよ、如来を求めようと欲するものは、アートマンを求めるべきなのです。アートマンというのは、仏陀の同義語なのです。アートマンが全く存在せず、認識されないように、ちょうどそのように、仏陀もまた、まったく存在せず、認識されないのです。アートマンが、いかなる法によっても言語化することができないように、そのように、仏陀もまたいかなる法によっても言語化することはできません。それに対するいかなる定義ももたないもの、それが仏陀と言われるのです。大徳シャーラッドヴァティーブトラよ、アートマンというその言葉は、理解することが容易ではありませんが、ちょうどそのように、仏陀ということばは、理解することが容易ではありません」 ātmeti bhadanta śāradvatīputra buddhasyaitad adhivacanam / yathā ātmā atyantatayā na samvidyate nopalabhyate, tathā buddho 'py atyantatayā na samvidyate nopalabhyate / yathā ātmā na kenacid dharmeṇa vacanīyaḥ, tathā buddho 'pi na kenacid dharmeṇa vacanīyaḥ / yatra na kācit samkhyā, sa ucyate buddha iti / na caitad bhadanta śāradvatīputra sukaram ājñātum ātmeti yad adhivacanam, evam etad bhadanta śāradvatīputra na sukaram ājñātum buddha iti yad adhivacanam // (347.7-12)

<sup>5</sup> 下田 [1997] 212-219 頁参照。なお、「アートマン」の仏教における語義・解釈については桂 [2011] が参考になる。

<sup>6</sup> これは『撰大乘論』に引用される重要な句。注 140 参照。

と同じであり、文字は平等で空であるから、すべての言葉は平等である、＜その文字によって聖人も非聖人も言葉を表示する＞としている。この節の最後には、＜様々な楽器によって音は出るが、それぞれの楽器には分別がないように、聖人は言葉による表示を行うが、そのことに執着することも固執することもない＞とある。ここには、本経の言語観がよく現れている。

#### (4)「法の話」と「聖なる沈黙」

XXI-2において、サマターヴィハーリンがマンジュシュリーに「集まって坐っている比丘たちにはすべきことが二つある。法の話をしなければならないことと、聖なる沈黙に住しなければならないことである」という世尊の言葉について、その意味を問う。この言葉は『ウダーナ』や『マジマニカーヤ』等に見られるものである。直後の三十七菩提分法の説明では、「法の話」はもちろん伝統的な教理の話であるが、「聖なる沈黙」はそれらに対する大乘的解釈である。その後の解説では、重点はむしろ「法の話」に置かれ、それは「すべての衆生の能力のすぐれているかどうかを理解して話をする事」であり、声聞・独覚には耐えられない領域であるとされる。XXI-4でも、このことについて反問するスプーティ長老に対して、「如来は、衆生たちの八万四千の〔心の〕活動のそれぞれに応じて薬を処方することによって」法の話をする事が強調される。本経の実践的な側面の一端を示すものと言えよう。

XXII-1では、世尊によって、この「法の話」と「聖なる沈黙」の教えが遠い過去において、普光如来によって説かれていたことが明らかにされる。ここで第4巻は終わるが、第5巻では、そのときその教えを受けた二人の菩薩（アクシャヤマティとヴィシェーシャマティ）が、それぞれ、今のマンジュシュリーとサマターヴィハーリンの前生であることが示され、そのときのエピソードが具体的に語られることになる。

## 2 和訳と訳注

### 第四巻 (bam po bzhi pa)

#### (XVIII-1)

<sup>8</sup>→ その時、法王子 (\*kumārabhūta)<sup>7</sup>であるマンジュシュリーがその集會に加わっていたが、黙したまま (\*tūṣṇībhāva) であった。←<sup>8</sup>

その時、ブラフマー神であるヴィシェーシャチンティンは、世尊にこう申し上げた。

「世尊よ、法王子たるマンジュシュリーはこの集會にいながら、あのよう〔黙したままで〕稱賛の言葉も〔法の〕話も (\*saṃgītikathā) まったく示そうとしません」

その時、世尊は、法王子たるマンジュシュリーに、こう仰せになられた。

「マンジュシュリーよ、この法の教示に関して、少しばかり話をしなさい」

マンジュシュリー (M) が申し上げる。 [P65a] 「世尊が正しく悟られた仏陀の法を表示するもの (\*prajñapti) が何かあるでしょうか」

<sup>7</sup> 「童真」の方が kumārabhūta (真実の童子 (= 梵行者)) の原義に近いが、今は「法王子」としておく。平川 [1995] および袴谷 [2000] 参照。

<sup>8</sup> Ch1,2 はこの部分を欠く。なお、マンジュシュリーは、第一巻冒頭でその名は挙げられていたが、実際に会座での応答に関わってくるのは、第四巻のこの場面からである。

〔世尊が〕仰せになる。「マンジュシュリーよ、その法を表示するものなど何もない」

〔Mが〕申し上げる。「世尊よ、その法は、語られるものでしょうか。話されるものでしょうか。説き示されるものでしょうか」

〔世尊が〕仰せになる。「マンジュシュリーよ、その法は語られるものではなく、話されるものではなく、説き示されるものではない」

〔Mが〕言う。「世尊よ、語られず話されず説き示されない法というものを、説明することができるでしょうか」

#### (XVIII-2)

〔ブラフマー神である〕ヴィシェーシャチンティン (V) が言う。「マンジュシュリーよ、あなたは、他の人 (\*sattva)、他の人物 (\*pudgala) たちに法を説くことはないのですか」

〔Mが〕言う。「ブラフマー神よ、法界を二つに分けることがあるでしょうか」

〔Vが〕言う。「そのようなことはありません」

〔Mが〕言う。「すべての法は法界に決定 (\*niyata) していないのですか」<sup>9</sup>

〔Vが〕言う。「決定しています」

〔Mが〕言う。「ブラフマー神よ、もし、法界が不二であって、すべての法が法界に決定しているのであれば、他の人、他の人物たちにどうして法を説くことがありますか」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、不二なるものに関して、法を説くことがありますか」

〔Mが〕言う。「ブラフマー神よ、もし、説く者、聞く者がいささかでも得られるのであれば、あります」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、如来は法を説かないのですか」

〔Mが〕言う。「ブラフマー神よ、説きますが、不二なのです。なぜなら、如来は、不二なるものとして法を説いて、二なるものとしては〔法を説くことは〕なさらないからです」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、もし、一切の法が不二であるなら、どうして愚かな凡夫たちは不二なるものを二とするのですか」

〔Mが〕言う。「<sup>10</sup> 自我 (\*ātman) という比喩的表現 (\*upacāra) に対して、自我を〔実体として〕捉えることによって、愚かな凡夫たちは、二をなします。<sup>10</sup> [しかし] 不二は、けっして二となることはありません。どれほど多く二をなしたとしても、不二という究極<sup>11</sup> においては、二ではないのです」 [P65b]

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、不二なるものを、どうやって知る (\*vijānāti) のですか」

〔Mが〕言う。「もし、知るのであれば、不二ではなくなります。不二は知ることがあります。ブラフマー神よ、<sup>12</sup> 二というものは、知ること (\*vijñāna) なのです。如来は、知

<sup>9</sup> Ch1:其法性者不可衡之一切法乎。Ch2:一切法不入法性耶。Ch3:一切法不入法性中耶。BP:〔サマンタクスマが〕言う。「大徳シャーリプトラよ、一切の法は、変化することのない法界に決定しているのに、どうして説いたり、聞いたりしなければならぬのでしょうか」(五島 [2011]119 頁) Cf. VKN:「〔法は〕法界に渉入している」 dharmadhātusamavasaraṇaḥ (ch.3 sec.6).

<sup>10</sup> Ch1:衆生猗名而受吾我、愚駭凡夫便造二事。Ch2:凡夫貪著我故分別二耳。Ch3:凡夫之人貪著我故分別爲二。

<sup>11</sup> Tib:gnyis su med pa'i mtha'(\*advayaakoṭi). Ch1:其眞際者則無有二、不造二事。Ch2, 3:其眞際無有二相。Cf. Gv:「〔善財童子は〕不二の究極の決定を獲得しており、法界の究極を分別することなく暮らしている」advayaakoṭiviniścayaprāpto dharmadhātukotyavikalpavihārī. (96.5)

ることなくして、法を説きます。←<sup>12</sup> その法は、教示された通りのものではありません。なぜなら、その法は、文字を持たないからです」

〔V が〕言う。「マンジュシュリーよ、如来による法の教示は、どこに行くのですか。」

〔M が〕言う。「ブラフマー神よ、<sup>13</sup>如来による法の教示は、行くことなくして（行くことのないところに）行きます (agatiṃ gacchati) ←<sup>13</sup>」

〔V が〕言う。「マンジュシュリーよ、如来は涅槃に行く法を教示しないのでしょうか」

〔M が〕言う。「<sup>14</sup>涅槃に行くとか来るとか〔いうこと〕を〔対象として〕認めますか ←<sup>14</sup>」

〔V が〕言う。「涅槃には来ることなく、行くこともありません」

〔M が〕言う。「ブラフマー神よ、それゆえ、如来は、行くことなくして行く法を教示するのです」

〔V が〕言う。「〔そういう法を〕どのように聞くのですか」

〔M が〕言う。「説かれた通りに」

〔V が〕言う。「どのように説くのですか」

〔M が〕言う。「理解することなく聞くことのないように」

〔V が〕言う。「如来の法を聞くのは誰ですか」

〔M が〕言う。「<sup>15</sup>対象 (\*viṣaya) に対して漏のない (\*anāsrava) 者たちです ←<sup>15</sup>」

〔V が〕言う。「この法は誰が理解するのでしょうか」

〔M が〕言う。「争うことなく<sup>16</sup>、理解することがなく、承諾することのない<sup>17</sup>者たちです」

〔V が〕言う。「マンジュシュリーよ、どのような場合に、争いの多い比丘なのですか」

〔M が〕言う。「〔<これは好い。これは悪い>というのが争いです。]<sup>18</sup> <これは適切である<sup>19</sup>、これは適切でない>というのが争いです。同様にして簡潔に示せば (\*saṃkṣepāt), <これは理にかなっている<sup>20</sup>、これは理にかなっていない>ということ。 <これは垢 (\*kleśa) であ

<sup>12</sup> Ch1:知教者也。如来雖説有至誠法。Ch2:二即是識業。不可識法佛所説也。Ch3:如来不説二法。

<sup>13</sup> Ch1:趣無所趣則爲如来之所説法。Ch2:佛所説法至無所至。Ch3:如来所説法無所取也。BP:〔V が〕言う。「どこにも行くこと (\*gati) がないので、一切の道 (\*gati) は非道 (\*agati) なのです」(五島 [2010]120 頁) Cf. VKN:「すべての世間的な道(輪廻的あり方)に行ってもすべての〔世間的〕道から引き下がっている。涅槃の道を行っても輪廻との結びつきを捨てることはない。このように、マンジュシュリーよ、菩薩は行くべきでないところに行くとともに、すべての仏法における道を行く(すべての仏法を熟知している) sarvalokagatiṃ ca gacchati, sarvagatinivṛttaś ca bhavati / nirvāṇagatiṃ ca gacchati, saṃsāraprabandhaṃ ca na jahāti / evaṃ mañjuśrīḥ bodhisatvo 'gatigamaṇaṃ gacchati, gatiṃgataś ca bhavati sarvabuddhadharmeṣu. (ch.7, sec.1)

<sup>14</sup> Ch1:其泥洹者寧有歸趣而反還耶。Ch2:涅槃中可得至耶。Ch3:於涅槃中涅槃有取捨耶。

<sup>15</sup> Ch1:假於法性無所聞者。Ch2:不漏六塵者。Ch3:不著不漏諸境界者。

<sup>16</sup> Tib:rtsod par mi 'gyur ba. Ch1,3:不諍訟。Ch2:無諍訟。漢訳から見て、原語は araṇa と想定される。直前の M の言葉にある「漏のない者 (\*anāsrava)」がこの語を引き出していると考えられる。BHS: araṇa, free from depravity, passion, impurity. =Tib. nyon mongs pa (also =kleśa) med pa.

<sup>17</sup> Tib:rjes su shes par mi 'gyur ba. Ch2:無分別。Ch3:不隨喜。

<sup>18</sup> Ch2, 3 のみ。

<sup>19</sup> Tib: rigs (\*yukta). Ch1:如應。Ch2:omitted. Ch3:相應。

<sup>20</sup> Tib:'brel ba (\*saṃbandha). Ch1:因縁。Ch2, 3:理。AD: saṃbandha, fit, proper, right.

る、これは浄 (\*vyavadāna) である>ということ。<これは善である<sup>21</sup>、これは不善である>ということ。<sup>22</sup>><これは非難されるべき行為 (\*sāvadya) である、これは非難されるべき行為ではない>ということ。<これは有漏である、[P66a] これは無漏である>ということ。<これは世間である、これは出世間である>ということ。<これは有為である、これは無為である>ということ。<sup>22</sup><これは持戒である、これは破戒である>ということ。<これはなすべきことである、これはなすべからざることである>ということ。<これは獲得されるであろう、これは獲得されないであろう>ということが争いです。

ブラフマー神よ、<sup>24</sup> 高慢になったり、謙遜したり<sup>23</sup>、受け取ったり、捨てたりする限り<sup>24</sup>、争うのです。如来は、争うことなく、法を教示します。戯論を喜ぶ者に、争いのないことはありません。争いの多い者に、沙門となることはありません。〔逆に〕沙門を欲する者には、争い<sup>25</sup>はありません」

〔V が〕言う。「マンジュシュリーよ、どのようにすれば、比丘は、如来の教えの通りに行い、お言葉の通りに行う<sup>26</sup>ことになるのですか」

〔M が〕言う。「ブラフマー神よ、比丘が称賛されたり非難されたりしても惑うことがなければ、その場合、教えの通りに行っていることとなります。文字の後を追うことがなければ、その場合、お言葉の通りに行っていることとなります。あらゆる特徴 (\*nimitta) という点で〔動揺なく〕平静でいる<sup>27</sup>ならば、その場合、教えの通りに行っていることとなります。意味に逆らうことがなければ<sup>28</sup>、その場合、お言葉の通りに行っていることとなります。法を守るのであれば、その場合、教えの通りに行っていることとなります。諸々の言葉<sup>29</sup>に逆らうことがなければ、その場合、お言葉の通りに行っていることとなります」

〔V が〕言う。「マンジュシュリーよ、どのようにすれば、比丘は正法 (\*saddharma) を守るのですか」

〔M が〕言う。「平等性 (\*samatā) に逆らわず、法界 (\*dharmadhātu) を壊すことがなければ、その場合、正法を守ることとなります」

〔V が〕言う。「マンジュシュリーよ、どのようにして、比丘は如来に近侍するのですか」

〔M が〕言う。「ブラフマー神よ、どのような法も近いとか遠いとかと見ることがなければ、そういう比丘が如来に近侍するのです」

〔V が〕言う。「どのようにして、マンジュシュリーよ、比丘は如来に礼拝し仕えるのですか」  
[P66b]

<sup>21</sup> BCHKLNPhT:dge ba. DP:dag pa. Ch1, 2, 3:善.

<sup>22</sup> Ch1, 2 はこの部分を欠く.

<sup>23</sup> Tib: 'dud pa. (\*namratā). AD :namratā, obeisance, respect; submissiveness, humility, condescension.

<sup>24</sup> Ch1:有名無名、興於有數合會之事. Ch2, 3:若於法中有高下心貪著取受.

<sup>25</sup> Tib: 'thab pa (\*raṇa), Ch2 有妄想貪著. Ch3 有妄想. Mvy 7528: raṇaḥ, nyon mongs pa'am 'thab pa'am gyur.

<sup>26</sup> Tib:bka' bzhin byed pa. Ch1:順言教. Ch2, 3:隨佛語. Mvy 2358: ājñākaraḥ, bka' bzhin byed pa. AD : ājñākara, obeying or executing orders, obedient. Cf. *Lank* 3.8: ājñākaro 'haṃ buddhānāṃ (ch.1 v.19a).

<sup>27</sup> Tib:mtshan ma thams cad las zhi bar gyur. Ch1:貪衆求入不以惑. Ch2:滅一切諸相. Ch3:滅一切法相.

<sup>28</sup> BLKPhT:don dang 'gal bar mi byed na. CDHNP: don dang mi 'gal bar byed na.

<sup>29</sup> Tib: tshig rnam (\*padāni, vacanāni). Ch1:正辭. Ch2, 3:佛語.

〔Mが〕言う。「ブラフマー神よ、身・口・意という点で行動を起こすことがなければ、そういう比丘は如来に礼拝し仕えるのです」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、誰が如来に供養をするのですか」。

〔Mが〕言う。「ブラフマー神よ、福德、福德でないこと、そのどちらでもない状態〔のどの〕行動もまったく起こさない人です<sup>30</sup>」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、誰が如来を見るのですか」

〔Mが〕言う。「肉眼・天眼・慧眼・法眼・仏眼〔のいずれ〕にも執着しない人が如来を見ます」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、誰が法を見るのですか」

〔Mが〕言う。「縁起を見て、〔それに〕逆らうことのない人たちです」

〔Vが〕言う。「<sup>31</sup>→ 誰が縁起を見るのですか ←<sup>31</sup>」

〔Mが〕言う。「<sup>32</sup>→ 平等性を起こさず、〔それに〕逆らわない人です ←<sup>32</sup>」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、誰が真智 (\*abhijñā) を得るのですか」

〔Mが〕言う。「漏を生じることなく、滅することのない人たちです」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、誰が如来の学処 (\*śikṣā) を学ぶのですか」

〔Mが〕言う。「行動すること (\*abhisamkāra) なく、経験すること (\*anubhāva) なく、〔何かを〕生起させることなく、〔何かを〕放棄することのない人たちです」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、誰が正しく修行する<sup>33</sup>のですか」

〔Mが〕言う。「三界に入らない人です」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、誰がよく調御されている (\*sunivīta) ののですか」

〔Mが〕言う。「再生 (\*punarbhava) を受けない人です」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、誰が幸福な人ですか」

〔Mが〕言う。「我がものという思いのない人たちです」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、誰が解脱しているのですか」。

〔Mが〕言う。「<sup>34</sup>→ 〔認識の〕対象 (\*ālambana) を破壊することのない人たちです ←<sup>34</sup>」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、誰が〔彼岸に〕渡っているのですか」

〔Mが〕言う。「輪廻と涅槃とに住することのない人です」

<sup>30</sup> Cf. VKN: 「福田菩薩が言った:〔欲界の〕福・非福と〔色界・無色界の〕不動の行為を起こすのが二です。また、福・非福・不動の行為を起こさないことが不二です。福・非福・不動の行為はそれぞれの特質というものを欠いている(自性空)のですから、福・非福・不動の行為というものは存在しません。このように深く考察すること、それが不二に入ることです」 puṇyakṣetro bodhisatva āha: puṇyāpuṇyāniñjyān saṃskārān abhisamkarotīti dvayam etat / yat punaḥ puṇyāpuṇyāniñjyānabhisamkāratā sādvyā / yā ca puṇyāpuṇyāniñjyānāṃ saṃskārānāṃ svalakṣaṇaśūnyatā na tatra puṇyāpuṇyāniñjyāḥ saṃskārāḥ / yaivam anumārjanāyam advayapraveśaḥ / (ch.8, sec.25) BHSD: anumārjati, considers, ponders thoroughly.

<sup>31</sup> Tib:sus rten cing 'brel bar 'byung ba rnam mthong. Ch1:誰爲觀見緣起者乎. Ch2:誰能順見諸因緣法. Ch3: 誰能順見諸因緣. チベット訳と2漢訳は、「縁起 (pratītyasamutpāda)」を「縁已生法 (pratītyasamutpannāḥ dharmāḥ)」をも含意するものと解しているように思われる。

<sup>32</sup> Ch1:其有平等不見起者也. 若使平等不復起者則無所生. Ch2:不起平等, 不見平等諸生相者. Ch3:不起平等, 不見平等不生不滅者.

<sup>33</sup> Tib: yang dag par zhugs. Ch1:獲致平等. Ch2, 3:正行. Pp 541.3-4: yogācārah samyakpratipannaḥ (D 182a4: rnal 'byor spyod pa yang dag par zhugs pa). BHSD: pratipanna, ppp. practised. Cf. 五島 [2009]171 頁.

<sup>34</sup> Ch1:不爲諸縛之所繫綴者也. Ch2, 3:不壞縛者.

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、漏尽(\*kṣīṇāsra)の比丘は何を尽くした(\*kṣīṇa)の  
ですか」

〔Mが〕言う。「ブラフマー神よ、もし尽くそうとするなら、漏は尽きないでしょう。[P67a]  
35→ それらの漏は刹那的なもの(\*kṣanika)ですから、彼がそれら〔の漏〕はそのようなものだ  
(刹那滅なものだ)と知ったときに←35、それ故に、漏尽と言われます」。

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、誰が真実を語る人ですか」

〔Mが〕言う。「一切の争い(\*raṇa)から完全に離れた人たちです」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、誰が道に入っていますか」

〔Mが〕言う。37→「ブラフマー神よ、愚かな人たちが道に入っています」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、誰が間違った道36に入っているのですか」

〔Mが〕言う。「一切の法はどこからも来ないどこにも行かないと知っている聖者たちです」

←37

38→〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、真実を見るのは誰ですか」

〔Mが〕言う。「いかなる法も見ない人です。なぜなら、見ている限り虚偽だからです。見ない  
人が真実を見るのです」←38

〔Vが〕言う。「何を見なければ39 真実を見るのですか」

〔Mが〕言う。「一切の邪見を見なければ、真実を見ます」

〔Vが〕言う。「それはどこで求められますか」

〔Mが〕言う。「四顛倒から真実は求められます」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、何を意図してそのようなことを説くのですか」

〔Mが〕言う。「四顛倒を求める人には、常もなく、楽もなく、我もなく、浄もありません40。  
常なきものは無常です。楽なきものは苦です。自我なきものは無我41です。42→ 浄なきものは不  
浄です。←42 ブラフマー神よ、一切の法に自我が無いことは聖なる真実(聖諦)を求めることで  
あり、真実を求めることは、苦を理解しないということ、乃至、道を修習しないこと(不見苦・  
不断集・不証滅・不修道)なのです」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、どのようにして道を修習するのですか」

〔Mが〕言う。「45→ 修習とは、実体43に陥ることなく、非実体に陥ることなく、いかなる法

35 Ch1:其諸漏者則無有本。了知無本此名漏盡。Ch2, 3:知諸漏空相。

36 BKL: lam ngan pa(\*kumārga). CDHN: lam ma yin pa(\*amārga). P: la ma yin pa. Ph: las ngan pa.

37 Ch1:愚癡凡夫乃成爲道亦不懷來於賢聖事無所歸趣曉了一切終始者也。Ch2:凡夫有入聖道(→道聖)行者知一切有爲  
法無所從來無所從去則爲(→無)入道。Ch3:梵天,凡夫者有入道。聖行者知一切有爲法無所從來無所從去則無入道。

38 [引用]『大乘掌珍論』

[Ch]: (又如)問言。「曼殊室利,諸見諦者當何所見」答言。「無有少法可見。所以者何。凡有所見皆是虛妄。若無所  
見乃名見諦」(Taisho vol.30 277a9-12)

39 KT: gang ma mthong bas. BCDHLNPPH: gang mthong bas. Ch1:何所觀者。Ch2, 3:不見何法。

40 Ch2のみは、以下の叙述を含めて、浄・常・楽・我の順番で説明する。

41 BLPhT: bdag med pa'o. DK: bdag yod pa'o. CHNP: bdag go. Ch1:非身。Ch2, 3:無我。

42 Ch1:其無空者非空亦然。

43 Tib: dngos po(\*vastu, bhāva).

をも実体とせず、非実体ともしないことです。ブラフマー神よ、二〔つの対立的な想〕<sup>44</sup>を離れるのが道です。←<sup>45</sup> 求めても一切の法を対象として取ることはない、というその方法が道です。[P67b] その道はどこに至ることもなく、捨てることもなく、輪廻もなく涅槃もないのです。なぜなら、至ることなく捨てることのないことが、聖人たちの道だからです」

## (XVIII-3)

その時、偉大なサーラ樹の如きバラモンの子<sup>46</sup>であるサマターヴィハーリン<sup>47</sup>がマンジュシュリー法王子にこう言った。「マンジュシュリーよ、どのように在家信者は仏に帰依するのですか。どのように法に帰依するのですか。どのように僧（教団）に帰依するのですか」

〔Mが〕言う。「良家の子よ、在家信者が二つの見解を起こすこと（\*upādāna）がないときです。二つとは何かと言えば、我見を起こさず、他見を起こさないこと。我見を起こさず、仏見を起こさないこと。我見を起こさず、法見を起こさないこと。我見を起こさず、僧見を起こさないこと。その限りにおいて、在家信者は仏・法・僧に帰依しているのです。」

また、良家の子よ、もし在家信者が如来を色として認知すること（\*anujñāna）なく、受〔として認知すること〕なく、想〔として認知すること〕なく、行〔として認知すること〕なく、如来を識として認知することがなければ、そうすれば、仏に帰依しているのです。もし、法を分別することなく、増益することがなければ、そうすれば、法に帰依しているのです。<sup>48</sup>もし、僧は無為であると信解するが、有為から減退して無為を信じるというのでなければ←<sup>48</sup>、そのような場合、僧に帰依しているのです。」

また、良家の子よ、もし在家信者が仏を対象としてとらえず、法を対象としてとらえず、僧を対象としてとらえないのであれば、そうであれば、仏・法・僧に帰依しているのです」

<sup>44</sup> 漢訳は「二事（Ch1）」「二相（Ch2, 3）」とするが、チベット訳はBP全体では「二つの想」と捉えていると判断される。例えば、第1章には「良家の子よ、それゆえ世尊は、〔人々に〕輪廻を減したり涅槃を獲得したりさせることはせず、輪廻と涅槃の二つの想（\*samjñā）を超越することをお説きになるのです」とある（五島 [2009]168頁）。この「二つの想（Tib: gnyis su 'du shes pa）」に関してCh1は「有生死泥洹之想……二」とし、Ch2, 3は「生死涅槃二相」としている。

<sup>45</sup> Ch1: 無念造行無不造行。Ch2, 3: 不分別是法是非法。

<sup>46</sup> Tib: bram ze shing sā la chen po lta bu'i bu. Ch1: 梵志大姓之子。Ch2. 摩訶〔婆〕羅梵天子。Ch3: 梵天婆羅門大婆羅子。Cf. *Adsp*156.10-11: brāhmaṇamahāsālakula (Eng. tr.: good brahmin family). *SP(TD)* p. 63, folio 124b6.

<sup>47</sup> Tib: mnyam par gnas pa. Ch1: 普行。Ch2. 等行。Ch3: 平等行。藏訳からは Samasthita という原語が想定されるが、『首楞嚴三昧経』に見られる「等行（mnyam pa nyid la gnas pa, \*Samatāvihārin）」というブラフマー神にその属性が通じる点が見られるので、ここでは仮に「サマターヴィハーリン（平等性に住する者）」としておく。このブラフマー神は、化作された如来たちの虚妄性・平等性について世尊に質問している（長尾・丹治 [1974] 197-200頁）。この「サマターヴィハーリン」と「偉大なサーラ樹」との関係は、時代的には後のものになるが、『虚空藏所問経』の以下の比喩が参考になるだろう。「例えば、大きなサーラ樹の森（\*mahāsālavana）があつて、そこに誰かがやって来て一本のサーラ樹を切ったとき、切られたサーラ樹以外の樹々が次のように、『これは切られたが、私たちは切られていない』と考えることはない。彼らには、喜び（\*anurāga）もなく、怒り（\*kopa）もなく、考えたり、分別したり、あれこれ想像したりすることもない。ちょうどそのように、忍辱、菩薩の忍辱たるものは、虚空の如く清浄なるものの最たるものなのである（Derge ed. Tohoku No.148 mDo sde Pa 257a1-3, Taisho No.597(8) Vol.13 97b22-25). Cf. MA 401.12-16 (restored Skt.).

<sup>48</sup> Ch1: 於諸有形而無所徇，亦不志樂於有形者，亦不志樂於無形者。Ch2: 不離有為法見無為法，不離無為法見有為法。Ch3: 信無為法僧，而不離有為法信無為法。

サマターヴィハーリンが言う。「マンジュシュリーよ、これら悟り（菩提）に向かって出発した菩薩たちはどこに向かって出発しているのですか」

〔マンジュシュリーが〕言う。<sup>49</sup>→ 何もない空き地 ←<sup>49</sup> に向かって出発したのです。[P68a] なぜかという、悟りは何にもない空き地に等しいからです」

〔サマターヴィハーリンが〕言う。「マンジュシュリーよ、どうしたら菩薩は悟りに向かって出発したと言われますか」

〔マンジュシュリーが〕言う。「良家の子よ、菩薩が、一切の出発は出発ではないと知り、一切の法は法ではないと知り、一切の衆生は衆生ではないと知るならば、そうすれば、良家の子よ、菩薩は悟りに向かって出発したと言われます」

## (XIX-1)

その時、偉大なるサーラ樹のごときバラモンの子であるサマターヴィハーリンは、世尊にこう申し上げた。「世尊よ、<sup>50</sup>→ どうしたら、菩薩、菩薩という風と呼ばれるのですか ←<sup>50</sup>」

世尊が仰せになる。「良家の子よ、<sup>51</sup>→ 菩薩とは、邪定 (\*mithyātvaniyata) の衆生に対しては悲心を生じ、正定 (\*samyaktvaniyata) の衆生に対しては特別の尊敬の念を生じることのない菩薩を指す言葉 (\*adhivacana) である。なぜならば、良家の子よ、菩薩は、正定と不定 (\*aniyata) の衆生のために悟りへの誓願をなすのではなく、むしろ、邪定の衆生のために悟りへの誓願をなす〔からである〕。それゆえ、菩薩と言われるのである。したがって、良家の子よ、菩薩は邪定の衆生に対して悲心を起こして悟りへと誓願をなす。それゆえ、彼は菩薩と言われる ←<sup>51</sup>」

## (XIX-2)

(1) その時、世尊に対し、ボーディ (Bodhi 悟り) という名の菩薩がこう申し上げた。「世尊よ、何故に菩薩というのか、<sup>52</sup>→ 私にもまた、〔このことに関してひらめきによって〕明らかになったことがあります ←<sup>52</sup>」

<sup>49</sup> Tib: bla gab med pa (\*abhyavakāśa). Ch1:空. Ch2, 3:虚空.

<sup>50</sup> Tib: ji ltar na byang chub sems dpa' byang chub sems dpa' zhes bgyi. Cf. *Asp*: 「世尊よ、菩薩、菩薩と言われる時の、その菩薩とは、世尊よ、どんな存在を指す言葉なのですか bodhisattvo bodhisattva iti yad idam bhagavann ucyate, katamasyaitad bhagavan dharmasyādhivacanam yad uta bodhisattva iti (3.5-6); *Bodhis*: bodhisattvo bodhisattva iti ca saṃkhyāṃ gacchati (8.19).

<sup>51</sup> Cf. 『大智度論』: 復次菩薩於諸邪定五逆衆生及斷善根人中、而生慈悲令入正道不求恩報 (Taisho vol. 25 275a25-27). 佛駄跋陀羅譯『華嚴經』「離世間品第三十三」: 覺悟正定衆生是菩薩藏、度脫衆生不失時故、教化成熟不定衆生是菩薩藏、善根相續因不斷故、發大悲心救護邪定衆生是菩薩藏、起彼未來善根因緣故。 (Taisho vol.9 657a10-14).

<sup>52</sup> Tib: bdag kyang spobs so. Ch1:我各志樂. Ch2, 3:我亦樂說. Cf. *SP* 101.10: pratibhāti no bhagavan. (Tib: bcom ldan 'das bdag cag spobs so.) *BHSD* 366, r13: It is perfectly clear to us, we are completely reassured. Lord.) prati-bhā には、「明るく輝く。～のように見える。心に現れる。心に思いつく。はっきりと理解される」などの意味があるが、仏典ではしばしば「ある事柄が、ある人に、ひらめき (直観智) によって明らかになる」意で用いられ、その名詞形の pratibhāna は、「ひらめきによって明らかになったことをあるがままに表現する能力 (弁才)」を表す。五島 [2010] 121 頁 (*BP* ch.2 sec.X-2) 参照。パーリ仏典における語義・用例については下田 [1996] (特に 38-39 頁) 参照。大乘経典での語義については『首楞嚴三昧経』中の説明が参考になる (長尾・丹治 [1974]270-272 頁)。

世尊が仰せになる。「ボーディよ、<sup>53</sup> 汝は〔ひらめきによって〕明らかにな〔ったことを語〕りなさい ←<sup>53</sup>」 [P68b]

ボーディが申し上げる。「世尊よ、たとえば、男あるいは女が、説かれた通り、八斎戒 (\*aṣṭāṅgaṣoḍha) を破ることなく、壊すことなく、遵守するときには、八斎戒を正しく受けたという呼称を得ます。世尊よ、ちょうどそのように、菩薩は、初心を起こして (\*prathamacit-totpāda) 以後、悟りの座に至るまで、菩提心から動揺〔して離れてしまう〕ことがありません。彼は、それ故に、菩薩と呼ばれます」

(2) ドリダマティ (Dṛdhamati 堅固な知恵をもつ)<sup>54</sup>菩薩が申し上げる。「世尊よ、もし菩薩が堅固な決意 (\*dṛdhādhyāśaya) によって、衆生を対象としてとらえない慈心を持つことがあれば、彼は、それ故に、菩薩と呼ばれます」

(3) サットヴァプラターナ (Sattvapratāraṇa 人々を〔悟りの対岸へと〕渡す)<sup>55</sup>菩薩が申し上げる。「世尊よ、たとえば、船や橋<sup>56</sup>は人々を渡すことに疲倦することがなく分別することがないように、世尊よ、一切の人々を救い上げるためにそのような心がある菩薩は、それ故に、菩薩と呼ばれます」

(4) アパーヤジャハ (Apāyajaha 悪い生存状態を打ち破る)<sup>57</sup>菩薩が申し上げる。「世尊よ、もし

<sup>53</sup> Tib: khyod spobs par bgyis shig. Ch1: 若欲樂者可説之耳. Ch2, 3: 便説. Cf. Asp: 「スプーティよ、菩薩大士はどのようにして智慧波羅蜜に向かって出ていくべきか、そういう菩薩大士たちの智慧波羅蜜について、汝に〔能弁の叡智〕がひらめくように」 pratibhātu te subhūte bodhisattvānām mahāsattvānām prajñāpāramitām ārabhya yathā bodhisattvā mahāsattvāḥ prajñāpāramitām niryāyur. (2.1-3) 興味深いことに、この世尊の言葉を聞いたシャーリプトラは、これから始まるスプーティによる説示が、彼自身の智慧とひらめきの力 (prajñāpratibhānabala) にもとづくものなのか、仏陀の威神力 (buddhānubhāva) によるものなのかについて疑問を抱く。経は、スプーティが仏陀の威神力によって般若波羅蜜について語っていく、とする。

<sup>54</sup> 『首楞嚴三昧経 (Śūraṅgamasamādhisūtra)』の主要登場人物・対告衆の一人、ドリダマティ (Dṛdhamati) 菩薩の「三昧」に関する世尊への問いからこの経典は始まる。長尾・丹治 [1974] によれば、この経典は「勝義の世界の知よりもむしろより多く世俗の世界の方便・慈悲に関心が寄せられている」という (427 頁)。

<sup>55</sup> Tib: sems can sgröl. Ch1: 度人. Ch2, 3: 度衆生. 原語は想定しがたいが、以下に挙げる『シクシャー・サムッチャヤ』の例を参考に、仮に、Sattvapratāraṇa としておく (Skt は cd 句を欠いているので訳はチベット訳に基づく)。

Sikṣ:

〔彼らは〕「〔向こう岸に〕渡す」という名の光を放つ。その光に鼓舞された人々は渴愛を棄てる。人々を渴愛の海から〔涅槃の岸へと〕渡すために彼らは〔誓願の〕鎧を着る。  
raśmi pramuñciya pratāraṇi nāmā tāya prabhāsaya codita sattvāḥ / (177.23)

.....//

sgröl zhes bya ba'i 'od zer rab gtong zhing // sems can gang dag 'od des bskul byas la //

de dag sred spangs sred pa'i rgya mtsho las // sems can sgröl ba'i don du go cha gyon //

(D 178b7-179a1)

<sup>56</sup> Cf. Bcyp :

彼岸に渡りたいと強く願っている人々にとっての船、橋、渡す手立て〔に私は成りたい (bhaveyam)〕  
pārepsūnām ca naubhūtaḥ setuḥ saṃkrama eva ca. (40.31 ch.3 v.17cd)

<sup>57</sup> Tib: ngan song sel. Ch1: 棄惡. Ch2, 3: 斷惡道. 原語は想定しがたいが、『マンジュシュリー・ムーラカルパ』に列挙される菩薩名 (MM 28.7-8: samantabhadraḥ, kṣitigarbhaḥ, gaganagañjaḥ, sarvaṇīvaraṇaviṣkambhī, apāyajahaḥ, maitreyaḥ, camaravyagrahasthaḥ ....) を参考に、仮に Apāyajaha としておく。この菩薩名は他に、6.18, 44.6, 80.8, 329.11 に見られる。

菩薩がある仏国土に手・足を置く<sup>58</sup>や、一切の悪い生存状態が鎮まるのであれば、彼は、それ故に、菩薩と呼ばれます」

(5) アヴァローキテーシュヴァラ (Avalokiteśvara [人々を] 観察することに自在な)<sup>59</sup>菩薩が申し上げる。「世尊よ、<sup>60</sup>ある菩薩を見るだけで人々が悟りに決定し、名を聞く〔だけで〕も一切の恐怖から免れる<sup>60</sup>のであれば、彼はそれ故に菩薩と呼ばれます」

(6) マハーストハーマプラープタ (Mahāsthāmaprāpta 偉大な力を得た)<sup>61</sup>菩薩が申し上げる。「世尊よ、もし菩薩が〔ヴィシュヌ神のごとく<sup>62</sup>〕闊歩して進む時<sup>63</sup>, [P69a] 三千大千世界の魔の宮殿がすべて振動することがあれば、彼はそれ故に菩薩と呼ばれます」

(7) アパリクヒンナ (Aparikhinna 疲れ飽きることのない)<sup>64</sup>菩薩が申し上げる。「世尊よ、<sup>66</sup>

<sup>58</sup> Tib:sug pa bzhag. Ch1:等立. Ch2, 3:投足.

<sup>59</sup> Tib:spyan ras gzigs kyi dbang po. Ch1:光世音. Ch2:觀世音. Ch3:觀世自在. 「觀自在 (Avalokiteśvara)」の語義解釈については、以下の『悲華經』の一節が重要であろう。Krp:「良家の子よ、ラトナガルバ如来はアニミシャ王子に予言をして、次のように仰った。『良家の子よ、汝は〔地獄などの〕苦界(悪趣)を観察(avalokita)し、天界を観察し、全ての衆生の苦〔しむ様子〕を観察した。衆生たちを苦から解放するために、煩惱を鎮めるために、悲心(kāruṇyacitta)を起こした。それゆえ、良家の子よ、汝はアヴァローキテーシュヴァラ(Avalokiteśvara 観察に自在なる者、観察された者たちにとっての救済者)という名になるであろう』 vyākṛtaḥ kulaputra ratnagarbheṇa tathāgatenāniṃṣo rājaputraḥ. evaṃ cāha, “yat tvayā kulaputrāvalokitā apāyāḥ avalokitāḥ svargā avalokitaṃ sarvasattvānāṃ duḥkham, saṃjanitaṃ kāruṇyacittaṃ sattvānāṃ duḥkhamocanārthaṃ kleśaprasāmanārthaṃ, tasmāt tvam kulaputrāvalokiteśvaro nāma bhaviṣyasi.(119.11-16) Cf. 斎藤 [2011].

<sup>60</sup> Cf. SP :

どのような理由から勝利者の息子はアヴァローキテーシュヴァラと呼ばれるのですか。

〔かの菩薩の名を〕聞くこと、〔その姿を〕見ること、同様にして、順次、〔彼のことを心に〕憶念することは、この世において、命ある者たちのすべての苦・輪廻の生存の悲哀を必ず消滅することに他ならない。

kena jinaṃputra hetunā ucyate hi avalokiteśvaraḥ // 24.1cd // (447.3)

śravaṇo atha darśano 'pi ca anupūrvam ca tathā anusmṛtiḥ /

bhavaṭīha amogha prāṇināṃ sarvaduḥkhabhavaśokanāśakāḥ // 24.4 // (448.3-4)

<sup>61</sup> Cf. 『観無量寿經』: 以智慧光普照一切, 令離三塗得無上力. 是故號此菩薩名大勢至. ……此菩薩行時, 十方世界一切震動 (Taisho vol.12 344a24-25, b1-2). Krp:「世尊が仰った: 汝は, 善男子よ, 偉大な力を求めた. 汝は, 自らが選び取った通りの場所を得るであろう. 汝は, 善男子よ, その仏国土で無上正等覚を得るであろう. スプラティシュトウヒタグナマニクータラージャという如来になるであろう. 力の如くに, 善男子よ, 汝は偉大な場所を選び取った. それゆえ, 善男子よ, 汝は<偉大な力を獲得した者(得大勢至)>となりなさい」 bhagavān āha / mahāsthāman te kulaputra prārthitaṃ / prāpsyasi tvam kulaputraivaṃrūpaṃ sthānaṃ yathā svayaṃ parigrhitaṃ / prāpsyasi tvam kulaputra tasmin buddhakṣetre 'nuttarāṃ samyaksambodhiṃ / supratīṣṭhitaḡaṇamaṇikūṭarājo nāma tathāgato bhaviṣyasi / yathā sthāman te kulaputra mahāsthānaṃ parigrhitaṃ, tena tvam kulaputra mahāsthāmaprāpto bhavasva / (122.16-123.2). 『悲華經』: 由汝願取大世界故. 因字汝為得大勢. (Taisho vol.3 186c11-12)

<sup>62</sup> Cf. 『リグ・ヴェーダ』:「この神(ヴィシュヌ)は三度, 百の讃歌(光線)を有する大地を〔その〕偉大さによって闊歩した(跨ぎ越えた)」 trir devaḥ pṛthivīm eṣa etāṃ vicakrame śatarcasam mahitvā / (7.100.3a)

<sup>63</sup> Tib:gom pa 'dor zhing mchi ba na. Ch1:擧脚經行. Ch2:所投足處. Ch3:足投地處. Cf. SP 66.6-7:「その仏国土においては菩薩たちは, その大半が, 宝の蓮を踏み歩む者となるであろう」 bodhisattvās tasmin buddhakṣetre yadbhūyāsā ratnapadmavikrāmiṇo bhaviṣyanti (Tib: byang chub sems dpa' rnam sangs rgyas kyi zhing de na phal cher rin po che'i pad ma'i steng nas gom pa 'dor zhing 'gro bar 'gyur te). BHSD : ratnapadmavikrāmin, adj. walking on jewel-step lotuses, i.e., with such lotuses appearing under their every step.

<sup>64</sup> Tib: kun tu mi skyo ba. Ch1:患厭. Ch2:無疲倦. Ch3:無疲倦. Tib からは anākhinna, aklānta などが想定されるが, 実際の対応例は管見の知る限り見られない. 漢訳「疲倦」には aparikhinna (Tib:yongs su mi skyo ba) の対応例が多

ガンガー河の砂〔の数〕のごとき〔無数の〕劫を一昼夜となし、それを一昼夜に数える〔という〕そのような方法で15日を半月、30日をひと月、12ヶ月を一年〔にしての〕百千コーティ年〔が経ってやっと〕一人の仏陀が出現して〔人々を〕喜ばせる〔としましょう〕。このようなあり方でガンガー河の砂〔の数〕にも等しい〔無数の〕仏国土において梵行を行じてのち、〔やっと〕授記されると〔というようなことになったと〕しても疲れ飽きることがない<sup>65</sup>のであれば、彼はそれ故に菩薩と呼ばれます」←<sup>66</sup>

(8) スサールタヴァーハ (Susārthavāha 隊商の良きリーダー)<sup>67</sup>菩薩が申し上げる。「世尊よ、もし菩薩が、悪い道にいる悪道の人々を正道に立たせる<sup>68</sup> ために大悲を起こし、〔しかも〕それに対する果報を望むことがなければ、彼はそれ故に菩薩と呼ばれます」

(9) マハースメール (Mahāsumeru 偉大なスメール山)<sup>69</sup>菩薩が申し上げる。「世尊よ、もし菩薩が、ちようどスメール山が〔様々な色を一つにしている〕<sup>70</sup>ように、あらゆる法を分別することなく求めるのであれば、彼はそれ故に菩薩と呼ばれます」

(10) ナーラーヤナ (Nārāyaṇa)<sup>71</sup>菩薩が申し上げる。「世尊よ、<sup>72</sup>もし菩薩が一切の煩惱によって壊されることがなければ、彼はそれ故に菩薩と呼ばれます」←<sup>72</sup>

(11)<sup>75</sup> チッタシューラ (Cittaśūra 心の勇猛な)<sup>73</sup>菩薩が申し上げる。「世尊よ、もし菩薩が心によってすべての法を思惟しても、そのとき〔その心自身は〕壊される<sup>74</sup>ことなく損なわれることがなければ、彼はそれ故に菩薩と呼ばれます」←<sup>75</sup>

く、以下の説明文では yongs su mi skyo ba が用いられているので、仮にこの aparikhinna を原語と想定しておく。

<sup>65</sup> Tib: yongs su mi skyo ba. Ch1: 建立於道亦不想念, 無有放逸亦無所疑, 心不懈厭. Ch2: 心不休息無有疲倦. Ch3: 心不休息無疲倦.

<sup>66</sup> [引用] 『大智度論』

復次若菩薩作是念, 如恒河沙等劫爲一日一夜, 用是日夜三十日爲月, 十二月爲歲, 如是歲數過百千萬億劫乃有一佛, 於是佛所供養持戒集諸功德如是恒河沙等諸佛, 然後受記作佛, 菩薩心不懈息不沒不厭悉皆樂行. (Taisho vol.25 275a20-25)

<sup>67</sup> Tib: 'ded dpon bzang po. Ch: 導師. いわゆる「八正士」あるいは「十六正士」の一人. Cf. 五島 [2009]144 頁. 『般若三昧経』によれば、この菩薩はシュラーヴァスティー (舎衛城) の在家信者である (Harrison[1990]p.11 & f.n.18). 隊商 (sārtha) の道案内 (desika) の具体的なイメージは『法華経』第7章のいわゆる「化城の喩」に詳しい (SP 187.4-188.11).

<sup>68</sup> Tib: lam ngan par zhugs pa'i sems can lam ngan par zhugs pa rnam la lam bzang po la dgod pa. Cf. Pp 371.13: 「誤った道から引き上げて正しい道にしっかりと立たせることが教えである」 unmārgād apanīya samyanmārgapratīṣṭhāpanam śāsanam (Tib: lam gol pa nas bzlog nas lam bzang po la 'god pa ni bstan pa'o).

<sup>69</sup> Tib: ri rab chen po. Ch1: 大山. Ch2: 須彌山. Ch3: 大彌樓山.

<sup>70</sup> Ch2, 3: 一於衆色.

<sup>71</sup> Tib: mthu bo che. Ch1: 鈎鎖. Ch2,3: 那羅延.

<sup>72</sup> Cf. 『大智度論』: 復次菩薩初發心以來不爲諸煩惱所覆所壞. (Taisho vol. 25 275a27-28)

<sup>73</sup> Tib: sems (→sems dpa' bo). Ch1: 勇心. Ch2,3: 心力.

<sup>74</sup> BKLPPHT: smas. CDHN: rmas.

<sup>75</sup> [引用] 『修習次第・後編』 (Bhāvanākrama III)

Skt: tathā ca tatrai(va brahma)paripr̥cchāyām uktam / cittaśūro bodhisattva āha / yaś cittena sarvadharmāṃś cintayati tatra cākṣaṭo 'nupahataḥ sa tenocyate bodhisattva iti / (Bhk 19.8-10)

(12) シンハヴィクラータガーマン (Siṃhavikrāntagāmin 獅子の歩き方で歩む者)<sup>76</sup> 菩薩が申し上げる。「世尊よ、もしある菩薩が、[P69b] 甚深の法を受け容れて畏れることもなく恐がることもなく、〔逆に〕他の一切の外道を恐れさせるのであれば、彼は、それ故に菩薩と呼ばれます」

(13) アチントヤ (Acintya 不可思議な)<sup>77</sup> 菩薩が申し上げる。「世尊よ、<sup>78→79→</sup>もし心で考えて不可思議 (\*acintya) に入り<sup>←78</sup>、〔しかも〕思惟したり分別したりすることが無ければ、彼はそれ故に菩薩と呼ばれます<sup>←79</sup>」

(14) スシーマ (Susīma 良き結界)<sup>80</sup> 天子が申し上げる。「もし、ある人があらゆる天宮に生まれて何ものにも執着せず、執着を離れる法を理解することもなければ、彼はそれ故に菩薩と呼ばれます」

(15) サットヤヴァーディン (Satyavādin 真実を語る)<sup>81</sup> 菩薩が申し上げる。「世尊よ、<sup>82→</sup>もし菩薩の言葉が真実に結びついており、夢の中においても妄語を言わないのであれば、彼はそれ故に菩薩と呼ばれます<sup>←82</sup>」

(16) プリヤダルシャナ (Priyadarśana 見る人が喜ぶ)<sup>83</sup> 菩薩が申し上げる。「<sup>84→</sup>もしある人がすべての色形を仏の色形として見るのであれば、彼はそれ故に菩薩と呼ばれる<sup>←84</sup>」

(17) ニトヤーヌカンピン (Nityānukampin 常に憐れみの心をもつ)<sup>85</sup> 菩薩が申し上げる。「世尊よ、<sup>86→</sup>もし菩薩が輪廻の中で苦しんでいる衆生を見て、法に対する喜びは除いて、また、衆生を成就する〔喜び〕は除いて、〔その他の〕一切の喜ばしいことに対して喜ぶことがなければ、彼はそれ故に菩薩と呼ばれます<sup>←86</sup>」

[Tib]: de skad tshangs pa zhus pa de nyid las kyang bka' stsal te / byang chub sems dpa' nams<sup>1</sup> k'is gsol pa / gang chos thams cad la sems k'is sems kyang der ma smras<sup>2</sup> ma nyams na de'i slad du byang chub sems dpa' zhes bgyis / (sDe dge 63b5-6) (Bhk p.32) 1) BP 漢訳や Bhk Skt から見れば、nams は sems dpa' bo とすべきであろう。2) 北京版も smras とするが、smas に訂正しなければならない。 Cf. Mvy 7355 : akṣatam, ma smas pa.

<sup>76</sup> Tib: seng ge'i 'gro su 'gro ba. Ch1:欲獅子變. Ch2, 3: 獅子遊歩自在. Cf. Mvy 279: Siṃhavikrāntagāmī, seng ge'i stabs su gshegs pa.

<sup>77</sup> Tib:mi khyab pa. Ch1:無念. Ch2, 3:不可思議.

<sup>78</sup> Tib:sems las bsam gyis mi khyab par 'jug cing. Ch1:假使以心入於心者. Ch2:知心相不可思議. Ch3:知心及法不可思議.

<sup>79</sup> Cf. 『大智度論』: 復次菩薩雖觀諸法實相, 於諸觀心亦不生著. (Taisho vol. 25 275a28-29)

<sup>80</sup> Tib:mtshams bzang. Ch1:普潤. Ch2, 3:善寂. 『般舟三昧經』によれば、スシーマは、「八正士」の一人でカピラヴァストゥ出身の在家の菩薩だが、これとは別に、天子 (devaputra) としてのスシーマも登場する (Harrison[1990] p.11, p.331(Glossary Susīma)).

<sup>81</sup> Tib:bden par smra ba. Ch1:誠言. Ch2, 3:實語.

<sup>82</sup> Cf. 『大智度論』: 復次菩薩自然口常實言, 乃至夢中亦不妄語. (Taisho vol. 25 275a29-b1)

<sup>83</sup> Tib:mthong na dga' ba. Ch1:愛敬. Ch2, 3:喜見.

<sup>84</sup> Cf. 『大智度論』: 復次菩薩有所見色皆是佛色. (念佛三昧力故於色亦不著.) (Taisho vol. 25 275b1-3)

<sup>85</sup> Tib: rtag tu snying brtse ba. Ch1, 2:常慘. Ch3:常悲. 原語は想定しがたいが、仮に Nityānukampin としておく.

<sup>86</sup> Cf. 『大智度論』: 復次菩薩見一切衆生流轉生死苦中一切樂中心亦不著. 但作願言. 我及衆生何時當度. (Taisho vol. 25 275b3-5)

(18) アプラティガ (Apratigha 怒ることのない)<sup>87</sup> 菩薩が申し上げる。「世尊よ、もし菩薩が一切の煩惱と一切の魔に対して怒ることがなければ、彼はそれ故に菩薩と呼ばれます」

(19) ニトヤプラハシタプラムディテンドリヤ (Nityaprahasitapramuditendriya 常に笑い歓喜している感官をもつ)<sup>88</sup> 菩薩が申し上げる。「世尊よ、もし菩薩が、常に笑い [P70a] 常に歓喜している感官によって自らの願い (\*āsaya) を満足させ、なすべきことをなし、[他の願いをも満足] させるならば、彼はそれ故に菩薩と呼ばれます」

(20) ヴィマティヴィドゥフヴァンシー (Vimatividhvamsī 意見の相違を解消する)<sup>89</sup> という女性 (\*bhaginī) が申し上げる。「世尊よ、もし菩薩が一切の法に関して意見の相違がなく、疑いがないならば、その人はそれ故に菩薩と呼ばれます」

(21) シンヒー (Siṃhī 牝のライオン) という童女 (\*kumārī) が申し上げる。「世尊よ、もし女の属性 (\*strīdharmā) も持たず、男の属性も持たず、衆生を成就するために種々の姿・形を示すのであれば、その人はそれ故に菩薩と呼ばれます」

(22) ラトナ (Ratna 宝) という女 (\*strī) が申し上げる。「世尊よ、<sup>90</sup> もし菩薩が仏・法・僧の三宝を除いた他の宝を喜ぶことがなければ、その人はそれ故に菩薩と呼ばれます ←<sup>90</sup>」

(23) ヴィシャーカーダッタ (Viśākhādatta ヴィシャーカー星宿によって授かった)<sup>91</sup> という在家信者 (\*upāsaka)<sup>92</sup> が申し上げる。「世尊よ、対象 (\*ālambana) を持つ者には菩提はありません。一切の法を対象とせず [いかなる法も] 生起させず消滅させなければ、彼はそれ故に菩薩と呼ばれます」

(24) バドラパーラ (Bhadrapāla すぐれた守護者)<sup>93</sup> という居士 (\*grhpati) が申し上げる。「世尊よ、ある菩薩の名を聞くだけで人々が菩提に決定するのであれば、彼はそれ故に菩薩と呼ばれます」

(25) ラトナチャンドラ (Ratnacandra 宝の月)<sup>94</sup> という童子<sup>95</sup> が申し上げる。「世尊よ、<sup>97</sup> もし菩薩が、常に不断に、童子 (\*kumāra) の梵行を持し、望ましいものを思惟の対象にはするが享受することはせず、<sup>96</sup> ましてや二人の [人間による] 二根の結合 (性交) などといった [快樂] は

<sup>87</sup> Tib: thogs pa med. Ch1: 莫能當. Ch2, 3: 心無礙.

<sup>88</sup> Tib: rtag tu dga' dgod dbang po. Ch1: 常笑喜根. Ch2, 3: 常喜根. Cf. VKN ch.1, sec.4: nityaprahasitapramuditendriyena (Tib: rtag tu dga' dgod dbang po).

<sup>89</sup> Tib: sring mo yid gnyis rnam par 'joms ma (DKLT: ma, BCHNPP: pa). Ch1: 壞諸疑網. Ch2, 3: 散疑 (女). 原語は想定しがたいが、仮に Vimatividhvamsī としておく.

<sup>90</sup> Cf. 『大智度論』: 復次菩薩於一切珍寶心不生著, 唯樂三寶. (Taisho vol. 25 275b5-6)

<sup>91</sup> Tib: sa gas byin. Ch1: 離憂施. Ch2, 3: 毘舍佉達多. Viśākhā は二十八宿の一つ (Mvy 3200 viśākhā, sa ga).

<sup>92</sup> Tib: dge bsnyen. Ch1: 清信士. Ch2, 3: 優婆夷 (\*upāsikā).

<sup>93</sup> Tib: bzang skyong. Ch1: 賢護. Ch2, 3: 跋陀婆羅. Bhadrapāla は八正士または十六正士の一人で『般舟三昧經』では、ラージャグリハ (王舍城) の在家の菩薩とされ、經の主要人物. 詳細は Harrison[1990] p.6-8 (f.n.7) 参照.

<sup>94</sup> この菩薩の名は『法華經』冒頭に「一生補処」の大菩薩の一人として挙げられている (SP 3.6).

<sup>95</sup> Tib: gzhon nur gyur pa (\*kumārabhūta). Ch1: 童女. Ch2, 3: 童子. 藏訳の kumārabhūta はいわゆる「法王子」の意味ではなく、「真実 (bhūta) の童子 (kumāra) (= 梵行者) という意味が込められているのであろう. 五島 [2011]202 頁注 37 参照.

いうまでもなく〔享受することはないの〕<sup>96</sup>であれば、彼は、それ故に菩薩と呼ばれます<sup>97</sup>」

(26) マンダーラヴァガンダ (Māṅḍāravagandha 曼陀羅華の香り) という天子<sup>98</sup>が申し上げる。「世尊よ、もし菩薩が戒の香りによって薫じられ、およそ戒の香り以外の香りを漂わせることがなければ、彼はそれ故に菩薩と呼ばれます」

(27) プリーティカラ (Pṛītikara 喜びを作る)<sup>99</sup> 菩薩が申し上げる。「世尊よ、もし菩薩が仏に仕え、正法を守り、人々を成就するという〔この〕三つのあり方 (\*dharma) に喜びを感じるなら、彼はそれ故に菩薩と呼ばれます」

(28) ブラフマー神たるヴィシェーシャチンティン (Viśeṣacintin 優れた考えを持つ者) が申し上げる。「世尊よ、<sup>100</sup>もし菩薩が仏法でない法などおよそ存在しないと見るなら、彼はそれ故に菩薩と呼ばれます<sup>100</sup>」

(29) マイトレーヤ (Maitreya 慈しみの人) 菩薩が申し上げる。「世尊よ、<sup>101</sup>もしある菩薩を見てただちに人々が慈しみの三昧を得るのであれば、彼はそれ故に菩薩と呼ばれます<sup>101</sup>」

(30) マンジュシュリー (Mañjuśrī 魅力的な美德) 法王子が申し上げる。「世尊よ、もし菩薩が一切の説法を説く場合、法の想もなく、法がないとの想もなく、私の想もなさず、他の想もなさなければ、彼はそれ故に菩薩と呼ばれます<sup>102</sup>」

(31) ジャーリニーブラバ (Jālinīprabha 縵網より光明を発する者) 菩薩が申し上げる。「世尊よ、もし菩薩の光が人々の一切の煩惱を鎮める<sup>103</sup>のであれば、彼はそれ故に菩薩と呼ばれます」

(32) サマンタクスマ (Samantakusuma 周囲いっぱいの花)<sup>104</sup>菩薩が申し上げる。「世尊よ、もし菩薩が十方世界において一切の仏国土が、まるで花がいっぱいに咲き満ちているかのごとくに、如来によって〔満たされている〕のを見れば、彼はそれ故に菩薩と呼ばれます」

<sup>96</sup> Tib:gnyis kyi dbang po gnyis mjal ba lta ci smos te. Ch1:何況志求於財富乎.Ch2, 3:何況身受.

<sup>97</sup> Cf. 『大智度論』:復次菩薩常斷婬欲, 乃至不生念想, 況有實事. (Taisho vol. 25 275b6-7)

<sup>98</sup> Tib:lha'i bu (\*devaputra). Ch1, 2, 3:初利天子.

<sup>99</sup> Tib:dga' byed. Ch1:造樂. Ch2, 3:作喜. *Mvy* 3420: pṛītikaraḥ, dga' byed. Cf. *Krp* :

世尊が仰った、

立ち上がれ、金剛〔の如き煩惱を〕を破壊する者よ、香りによって多くの国土が満たされた、  
汝は、人々の幸福・喜びを作るものである、優れた世間の父となるであろう。

bhagavān āha /

uttiṣṭha vajrabhedakara gandhena sphuṭā kṣetrabahū /

sattvasukhaṃ pṛītikaro (Tib:dga' byed pa) bhesyasi varalokapitā // (173.1-5)

<sup>100</sup> Cf. 『大智度論』:復次菩薩能令一切法悉為佛法, (無有聲聞辟支佛法凡夫之法種種差別.) (Taisho vol. 25 275b8-10)

<sup>101</sup> Cf. 『大智度論』:復次衆生眼見菩薩者即得慈三昧. (Taisho vol. 25 275b7-8)

<sup>102</sup> Cf. 『大智度論』:復次菩薩分別一切法, 於一切法中亦不生法相, 亦不生非法相. (Taisho vol. 25 275b10-11)

<sup>103</sup> *BP* (XII-2) (五島 [2011]203-4 頁)によれば、この菩薩の縵網 (jāla) のある右手の爪から放たれた光明 (prabhā) は、十方世界の悪道の生き物たち、煩惱に苦しむ人々に対して、歓喜と幸福を与えるという。この煩惱のことを阿含經典では Jālinī (愛網) と呼び、tañhā (Skt.trṣṇā) と同義語とする。例えば『法句経』180ab 句には、「誘うべく網のように絡みつく渴愛は、かの人 (ブツダ) にはどこにも存在しない (yassa jālinī visattikā tañhā n'atthi kuhiñci netave)」とある。Cf. *BHSD* p.242:jālinī. Jālinīprabha (縵網より光明を発する者) には「愛網 (渴愛) [を鎮める] 光明を持つ者」の意も含意されていると考えるべきだろう。

<sup>104</sup> この菩薩については五島 [2011]198-201 頁 (*BP* XI 1~3) 参照。

このように、彼ら菩薩たちは、それぞれのひらめきに基づく叡智 (\*pratibhāna) を言葉にした。その時、世尊は、偉大なサーラ樹の如きバラモンの子であるサマターヴィハーリン<sup>105</sup>に仰せになられた。[P71a]「もし菩薩が、苦しんでいる衆生を〔その苦から〕解放することができて、あらゆる喜びの根をすべての衆生に施すならば、彼はそれ故に菩薩と呼ばれる」

## (XX-1)

その時、ブラフマー神であるヴィシェーシャチンティン (V) は、マンジュシュリー法王子 (M)<sup>106</sup>に次のように語った。「良家の子よ、あなたはどのような住し方 (\*vihāra)<sup>107</sup> で住しているのですか」

〔M が〕言う。「あらゆる作られたもの (\*saṃskṛta) の中にいるすべての衆生が住している住し方で」

〔V が〕言う。「あらゆる作られたものの中にいるすべての衆生が住している住し方とは、どのような住し方ですか」

〔M が〕言う。「一切の如来が住する住し方です」

〔V が〕言う。「一切の如来はどのような住し方で住するのですか」

〔M が〕言う。「第一義の空性に住する住し方です」

〔V が〕言う。「では、もし、良家の子よ、一切の凡夫が住する住し方で一切の如来が住するのであれば、如来がたにどのような優れた点 (\*viśiṣṭatā) があるのでしょうか」

〔M が〕言う<sup>108</sup>。「ブラフマー神よ、では、空性に優れた点があると主張するのですか」

〔V が〕言う。「マンジュシュリーよ、そのようなことはありません」

マンジュシュリーが言う<sup>109</sup>。「世尊は、一切法は空だと仰せにならなかったらうか」

〔V が〕言う。「その通り〔仰せになりました〕」

〔M が〕言う。「ブラフマー神よ、それ故一切法に区別はなく、それらの住し方も同じ特徴もっているのです。ブラフマー神よ、如来は法を種々に表示 (\*prajñapti) することはありません」

(XX-2)<sup>110</sup>

〔V が〕言う<sup>111</sup>。「マンジュシュリーよ、住 (\*vihāra)、住というその住とは一体何ですか」

<sup>105</sup> 注 46, 47 参照.

<sup>106</sup> Ch1: 普行菩薩. Ch2: 等行菩薩. Ch3: 平等行梵天婆羅門大婆 (→ 娑) 羅子. この (XX-1) では蔵訳がヴィシェーシャチンティンの対論者をマンジュシュリーにするのに対して、3 漢訳はいずれも対論者をサマターヴィハーリンとする。ただし、Ch3 は、注 108 の箇所以降ではマンジュシュリーに対論者を変える。

<sup>107</sup> Tib: gnas. Ch1, 2, 3: 行.

<sup>108</sup> Ch1: 答曰. Ch2: 等行言. Ch3: 平等行梵天婆羅門大婆 (→ 娑) 羅子言.

<sup>109</sup> Ch1: 答曰. Ch2: 等行言. Ch3: 文殊師利問.

<sup>110</sup> この (XX-2) では、Tib と Ch1, 2 はヴィシェーシャチンティンとマンジュシュリーとの対論、Ch3 はサマターヴィハーリンとマンジュシュリーとの対論としている。

<sup>111</sup> Ch1: 於是持心梵天問溥首曰. Ch2: 爾時思益梵天問文殊師利言. Ch3: 平等行梵天婆羅門大婆 (→ 娑) 羅子問文殊師利法王子言.

〔Mが〕言う。「ブラフマー神よ、四梵住(\*catvāro brahmavihārāḥ)があるところ、そこが住なのです。ブラフマー神よ、四梵住を離れている人は〔正しい〕住に住してはいません。もし、ある住に住して四梵住を成就するのであれば、その住が〔正しい〕住なのです。〔P71b〕ブラフマー神よ、<sup>114</sup>→ 荒野や戸外の広々とした空間(露地)(\*abhyavakāśa)に住していても、四梵住を離れているならば、彼は〔正しい〕住に住してはいないのです。住に巧みではないのです。<sup>112</sup>

もし、<sup>113</sup>→ 宮殿や楼閣で、黄金のベッド(\*paryāṅka)の上にマットレス(\*tūlika)や掛け布団が準備された(\*prajñapta)所<sup>←113</sup>に住していても、四梵住を有するのであれば、彼らは、〔正しい〕住に住しており、住に巧みなのです<sup>←114</sup>」

<sup>117</sup>→〔Vが〕言う。「どのような住に住すれば、<sup>115</sup>→ 知恵(\*jñāna)を見ることになりますか<sup>←115</sup>」

〔Mが〕言う。「<sup>116</sup>→ 自我を見るのが清浄となるような住し方によってです<sup>←116</sup>」<sup>←117</sup>

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、自我を見るのが知恵を見ることなのですか」

〔Mが〕言う。「ブラフマー神よ、その通りです。<sup>118</sup>→ 自我を見る者が知恵を見ます<sup>←118</sup>。ブラフマー神よ、たとえば、黄金を見分けるのが巧みな者が、悪しきものを見分ける知によって良きものを見分ける知が決定するように、ちょうどそのように、自我を見ることによって知恵を見るのが清浄になるのです」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、自我を見るとはどういうことですか」

〔Mが〕言う。「ブラフマー神よ、それは無我の法にほかなりません。ブラフマー神よ、自我とは、完全に非存在(\*abhāva)であり、完成されないものです。そのように決定されていること<sup>119</sup>、それが自我を見ることなのです」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、あなたが語った意味を私が理解したことに従えば、自我を見ることによって仏を見ます。なぜかと言えば、自我の自性は仏の自性だからです」

<sup>120</sup>→〔Mが〕言う。「ブラフマー神よ、そのとおりです」

〔Vが〕言う。<sup>←120</sup>「マンジュシュリーよ、誰が如来を見るのですか」

〔Mが〕言う。「我見を壊さない者です。なぜかという、<sup>121</sup>→ 自我を観ることは法を観ることであり、法を見ることによって如来を見るからです<sup>←121</sup>」

<sup>112</sup> 蔵訳では全ての版がここに smras pa を入れるが、漢訳や前後の文脈から見て、テキストから削除する。

<sup>113</sup> Tib:gser gyi khri la gding ba dang dgab pa bshams pa. Ch1:答曰紫金床座敷具重疊. Ch2, 3:金銀床榻妙好被褥.

<sup>114</sup> Ch1, 2 は、<四梵住を成就しておれば、荒野や露地に住していても住に住している。四梵住を成就していなければ、宮殿楼閣の中に住していても住に住しているとは言えない>という風に表現の仕方を変えている。

<sup>115</sup> Ch1:慧見行. Ch2:知見清淨.

<sup>116</sup> Ch1:假使行者空不見身. Ch2:於諸行中能淨我見.

<sup>117</sup> Ch3 はこの部分を欠く。

<sup>118</sup> Ch1:其不見我則觀慧矣. Ch2:若見我實性即是實知見. Ch3:若見我見彼非智見.

<sup>119</sup> Tib:de ltar mgo gcig tu gyur pa. Ch1:如是一類. Ch2:若能如是知者. Ch3:以彼如是畢竟決定故.

<sup>120</sup> 漢訳はすべてこの部分を欠く。

<sup>121</sup> Tib:bdag tu lta ba ni chos su lta ba ste, chos mthong bas sangs rgyas mthong ba'o. Ch1:其不見我則爲見法, 其見法者即爲見佛. Ch2:我見即是法見, 以法見能見佛. Ch3:我見法見佛見平等. Cf. JĀA sec.34:「縁起を見る者は法を見る. 法を見る者は如来を見る」 yaḥ pratīyasamutpādaṃ paśyati sa dharmāṃ paśyati. yo dharmāṃ paśyati sa tathāgataṃ

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、どのような理由から、行動を起こさない者（不行者）が正しく行動する者（正行者）となるのでしょうか」

〔Mが〕言う。「ブラフマー神よ、あらゆる作られたもの（\*saṃskṛtabhāva）<sup>122</sup>を行じない者が正行者です」

[P72a] 〔Vが〕言う。「どのように行じたら正行者と言われるのですか」

〔Mが〕言う。「断棄（\*prahāṇa）するためにではなく、直証（\*sākṣātkāra）するためにではなく、行じる者が正行者と言われます」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、どのような人たちが、如来を見ることなく、聖なる慧眼（\*prajñācakṣus）が清浄になる方法をもつのでしょうか」

〔Mが〕言う。「ブラフマー神よ、如来に対して二〔つの想〕を見ない人たちの聖なる慧眼は清浄になります」

<sup>123</sup>→<sup>125</sup> 〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、慧眼によって何を見るのですか」

〔Mが〕言う。「ブラフマー神よ、もし何らかの法を見るのであれば慧眼ではなくなりま  
す。←<sup>123</sup> ブラフマー神よ、慧眼は有為も見ませんし、無為も見ません。なぜかといえば、智慧（\*prajñā）は分別することなく、それが無為を見ることなどありえないからです。無為なるものは眼の領域（\*cakṣuspatha）<sup>124</sup>を越えているから、それを見ることはありません」←<sup>125</sup>

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、正行の比丘が果報を得ないなどという道理があるのでしょうか」

〔Mが〕言う。「ブラフマー神よ、正行には、果報を得ることなどありません。正行者はどんなことを行じません。彼には果報を得るのだと分別することもあります。ブラフマー神よ、無得によって得を見るのです。獲得する者には見るという高慢さ（\*abhimāna）があります。正行者には、高慢も非高慢もともにありません。獲得することもなければ〔真理を〕直証することもありません」

〔Vが〕言う。「マンジュシュリーよ、<sup>126</sup>→ どのような法を直証したら、〈悟った〉と示されるのですか←<sup>126</sup>」

〔Mが〕言う。「ブラフマー神よ、〔自ら〕生じることなく、〔他を〕生じさせることなく、<sup>127</sup>→

paśyati. (128.9-10) SN: 「ヴァッカリよ、法を見る者は私を見る。私を見る者は法を見る。ヴァッカリよ、実に、法を見ている時に私を見る。私を見ている時に法を見る」 yo kho vakkali, dhammaṃ passati so maṃ passati. yo maṃ passati so dhammaṃ passati. dhammaṃ hi vakkali, passanto maṃ passati. maṃ passanto dhammaṃ passati. (vol.3 120.28-31)

<sup>122</sup> Tib: 'dus byas kyi dngos po thams cad. Ch1: 成就諸有形事. Ch2, 3: 一切有為法.

<sup>123</sup> [引用] 『大乘掌珍論』

〔Ch〕: 是故經言。「曼殊室利、慧眼何見」答言。「慧眼都無所見」(Taisho vol.30 274c7-8)

<sup>124</sup> Tib: mig gi lam. Ch1: 眼跡. Ch2: 眼道. Ch3: 慧眼. Cf. VKN cakṣuspathasamatikrāntam. (ch. 11 sec.1)

<sup>125</sup> [引用] 『大乘掌珍論』

〔Ch〕: (又如) 問言。「曼利、言慧眼者當何所觀」答言。「有少所觀者即非慧眼。由此慧眼無分別故不觀有為。亦復不能觀於無為、以諸無為非此慧眼所應行故」(Taisho vol.30 276c25-29)

<sup>126</sup> Ch1: 以何等法而為約時而云約時. Ch2: 得何等法故名為得道. Ch3: 為得何法說名得道.

生じさせられることもない←<sup>127</sup>、そういう法を直証するが故に、〈悟った〉と示されるのです」

〔V が〕言う。「マンジュシュリーよ、生じることのない法を直証するとはどういうことですか」 [P72b]

〔M が〕言う。「およそ不生なるもの、それこそが直証なのです。それゆえ、すべての有為は不生であると見て、〈正しさの確定（正定 \*samyaktvaniyata）に入った<sup>128</sup>〉とされるのです」

〔V〕言う。「マンジュシュリーよ、〈正しさの確定に入った〉ということは、どこにおいてなされるのですか」

〔M が〕言う。「自我と涅槃とは等しく、これは不二 (\*advaya) であり、分けられないもの (\*advaidhikāra) です<sup>129</sup>。それゆえ、〈正しさに確定した (\*samyaktvaniyata) 〉と言われます。<sup>130</sup>→ 正しさに (\*samyaktve) いった場合に、それ故に、〈正しく確定した (\*samyagniyata) 〉と言われます。←<sup>130</sup> <sup>131</sup>→ 平等性 (\*samatā) の平等性 (究極の平等性) において出離した (\*niryāta) ならば、それ故に、〈正しく確定した (\*samyagniyata) 〉と言われます。←<sup>131</sup> 確定した意味 (nges pa'i don, \*nītartha) として意味 (don, \*artha) を伝える ('dren pa, \*nayati) ならば、それ故に、〈正しく確定した (\*samyagniyata) 〉と言われます。<sup>132</sup>→ 一切の禪定を増益する (\*samāropa) ことが無いゆえに←<sup>132</sup>、それは〈正しく確定した (\*samyagniyata) 〉と言われます」

その時、世尊は、マンジュシュリー法王子に、「よろしい」との言葉をかけた。「マンジュシュリーよ、汝のこの言葉はよく語られた。〔汝が〕語った通りである。汝がこの説をなした時、七千の比丘が汚れがなくなり、煩惱 (\*āsrava) から心が解放された。三万二千の天子<sup>133</sup> が法に対して眼に汚れが無くなり、汚れを離れた法眼が生じた。一万もの生き物<sup>134</sup>が離欲を得た。二百の生き物<sup>135</sup>が無上正等覚に向かって発心した。五千<sup>136</sup>の菩薩には無生法忍が生じた」

### (XX-3)

その時、ブラフマー神であるヴィシェーシャチンティン (V) は世尊にこう申し上げた。「世尊よ、マンジュシュリー法王子は仏陀の仕事 (\*buddhakārya) をなしました」

<sup>127</sup> Tib:skyed par mi 'gyur ba. Ch1:亦無當生. Ch2:亦不衆緣生. Ch3:後亦不生.

<sup>128</sup> Tib:yang dag pa nyid du nges par 'jug pa. Ch1:平等. Ch2:入正位. Ch3:得證正定.

<sup>129</sup> Cf. *Asp*: 「それゆえ、天子たちよ、幻と涅槃は不二であり分けられないものである」 iti hi devaputrā māyā ca nirvāṇaṃ ca advayam etad advaidhikāram. (20.24-25)

<sup>130</sup> Ch1:其平等者無所倚據是謂平等. Ch2:又行平等故名爲正位. Ch3:以隨正定是故說名證正定也. Ch1 と Ch2 は samayaktva を samatā の意に解して、次の説明に繋げている.

<sup>131</sup> Ch1:所演平均是謂平等. Ch2:以平等出諸苦惱故名爲正位. Ch3:以畢竟得平等法故說名正定. Ch1 と Ch3 は単に samayaktva を samatā の意に解した説明であるが、Tib と Ch2 は samayaktva を samatā に、niyata を niryāta に見立てた Word-play になっている.

<sup>132</sup> Ch1:鑷除一切所可思念. Ch2:除一切憶念故. Ch3:以不戲論諸三昧故.

<sup>133</sup> Ch1:二萬二千天子. Ch2, 3:三萬二千諸天.

<sup>134</sup> Ch1:一萬比丘. Ch2, 3:十千人.

<sup>135</sup> Ch1:二百天人. Ch2, 3:二百人.

<sup>136</sup> Ch1, 2, 3:五百.

<sup>137</sup>→ マンジュシュリー (M) が言う。「ブラフマー神よ、仏の出世は、いかなる場合も、利益とか損害につながる (\*pratyupasthita) ことはありません」

〔V が〕言う。「マンジュシュリーよ、世尊は無量の衆生を完全に涅槃させ、<sup>←137</sup> [P73A] あなたもまた無量の衆生を完全に涅槃させるのではないですか」

〔M が〕言う。「ブラフマー神よ、<sup>138</sup>→ 衆生など存在しないのに、衆生を〔存在するものとして〕創り出そうとする (\*prabhāvayati) のですか<sup>←138</sup>」

〔V が〕言う。「そんなことはありません」

〔M が〕言う。「ブラフマー神よ、衆生が存在しないのに衆生に説き、あるいは、衆生が存在しないのに衆生を完成させようとするのですか」

〔V が〕言う。「そんなことはありません」

〔M が〕言う。「ブラフマー神よ、如来の出世や滅度を望むのですか」

〔V が〕言う。「そんなことはありません」

〔M が〕言う。「如来が涅槃させる衆生とはどういう人たちですか」

〔V が〕言う。「マンジュシュリー法王子よ、<sup>139</sup>→ [あなたが] 法の導き [を説くそ] の説き方にしたがえば、<sup>←139</sup> そこには輪廻もなければ、涅槃もありません」

〔M が〕言う。「ブラフマー神よ、その通りです。<sup>140</sup>→ 如来は輪廻を認識の対象とせず、涅槃も認識の対象とはしません。<sup>←140</sup> ブラフマー神よ、世尊によって教化された声聞たちも、輪廻を認識の対象とせず、涅槃も認識の対象とはしません。ブラフマー神よ、涅槃と言われるものは、概念による言語習慣 (\*prajñaptivyavahāra) にすぎません。ここには、輪廻も存在しませんし、涅槃も存在しません」

<sup>144</sup>→ 〔V が〕言う。「マンジュシュリーよ、このことを誰が信じるのでしょうか」

〔M が〕言う。「いかなる法にも執着しない人たちです」

〔V が〕言う。「マンジュシュリーよ、執着というのは、何に執着するのですか」

〔M が〕言う。「ブラフマー神よ、執着というのは、無 (非存在)<sup>141</sup> に執着することです。ブラフマー神よ、もし、有 (存在)<sup>142</sup> に執着するのであれば、このように [いつまでも] 増上慢から

<sup>137</sup> Ch3 はこの部分を次のようにしている:大饒益衆生。令無量衆生入於涅槃。佛言。善男子。

<sup>138</sup> Ch1:無有人類反欲令有乎。Ch2:汝欲於無衆生中得衆生耶。Ch3:汝謂衆生有數量耶。

<sup>139</sup> Tib:chos kyi tshul gyi nman pa gang gis ston pa ltar na. Ch1:其法不生。向者所說如茲計之。Ch2:如仁所說義。Ch3:何等法性……如是說法。

<sup>140</sup> Ch1:如來至真不得生死而不滅度。Ch2:諸佛世尊不得生死不得涅槃。Ch3:如來不得世間不得涅槃。

[引用] 『攝大乘論』(Mahāyānasamgraha) 五島 [2009]168 頁, 注 129 参照。

〔Tib〕: ( bcom ldan 'das kyis ci la dgongs te / ) tshangs pas zhus pa las de bzhin gshegs pas 'khor ba yang ma dmigs / nya ngan las 'das pa yang ma dmigs ( zhes bstan zhe na / ) (MSg APPENDIX 70.3-4. )

〔Ch1〕: (世尊依何密意) 於 梵問經 中說。如來不得生死不得涅槃。(玄奘譯「攝大乘論本」)

〔Ch2〕: (世尊依何義故) 於 梵天問經 中說。如來不見生死不見涅槃。(笈多共行矩等譯「攝大乘論」)

〔Ch3〕: 婆羅門問經 中言。(世尊依何義如此言。) 如來不見生死不見涅槃。(真諦譯「攝大乘論」)

〔Ch4〕: (有何義故) 於 梵王經 中說。我不見世間不證涅槃。(佛陀扇多譯「攝大乘論」) (MSg 43)

<sup>141</sup> Tib:med pa(\*asat). Ch1, 2:虛妄。

<sup>142</sup> Tib:yod pa (\*sat). Ch1:誠諦。Ch2:實。前注と合わせれば、原語は sat-asat と想定される。この対語には「有 (存在)・無 (非存在)」と「真実・虚妄」がともに含意されている。五島 [2010]101-102 頁, 注 67 参照。

離れることはありません。このように、無に執着しているのです。それゆえ、無を理解すれば、執着することはありません。[P73b] 執着しない人は輪廻しません。輪廻しない人は、<sup>143</sup> [様々な境界へと] 逝去していきることがありません<sup>←143</sup>。[様々な境界へと] 逝去していきことがなければ、それが涅槃とされます<sup>←144</sup>。

[Vが]言う。「マンジュシュリーよ、涅槃というものは、何を対治するするもの (\*pratipakṣa) だから、涅槃とされるのですか」

[Mが]言う。「<sup>145</sup>→ブラフマー神よ、涅槃というものは、相互依存の条件 (\*anyonyapratyaya) に確定して (\*vyavasthita) はいないのです。<sup>←145</sup> <sup>146</sup>→無明 (\*avidyā) が形成 (\*abhisamkāra) されなければ、行 (\*saṃskāra) は活動しないので、[条件が] 適合することはありません (\*upayujyate)。←<sup>146</sup> およそ [条件が] 適合しないものは生起 (\* samutthāna) しません。生起しないものは、涅槃している (\*nirvṛta) といわれます。不生起を実践することが究極的な止滅 (\*atyantanirodha) です。この道を現観 (\*abhisamaya) することが究極的な不生<sup>147</sup>なのです。これが、四聖諦といわれるものです」

## (XXI-1)

その時、偉大なサーラ樹の如き婆羅門の子であるサマターヴィハーリン (S) がマンジュシュリー (M) 法王子にこう言った。「マンジュシュリーよ、あなたが語ったことはすべて正しく説かれたものです」

[Mが]言う。「良家の子よ、すべての言葉は正しいのです」

[Sが]言う。「マンジュシュリーよ、<sup>148</sup>→虚偽の言葉を持たないもの〔は勿論として〕、正し

<sup>143</sup> Tib: rnam par mi 'gro ra (\*na vigacchati). Ch2: 無生死往来。

<sup>144</sup> Ch3 ではこの部分を戲論をめぐる問答にしている：梵天問言。諸有所説諍訟言語。如此言語説何等法。答言。梵天。是戲論耳。不説衆生。梵天。若有戲論然則常無我慢。以是義故。於無物中而戲論也。以知無實有戲論故。不見戲論。若不見戲論。彼人不行世間。若不行世間則不異見。以不異見故説涅槃。

<sup>145</sup> Ch1: 梵天、其滅度者名轉相因。Ch2: 滅度者名爲衆緣不和合。Ch3: 梵天、入涅槃者彼此因緣不相和合。  
[引用] 『大乘寶要義論』(Sūtrasamuccaya)

[Tib]: yang gsungs pa / tshangs pa yongs su mya ngan las 'das pa zhes bya ba ni / phan tshun du rkyen gyis sgro btags pa med pa'o zhes 'byung ngo // (SS 122.2-4. D No.3937 Ki 187b2)

[Ch]: 佛言。「大梵、此互爲緣所成立故」(Taisho vol.32 64b17)

BPの本文では、発言者はマンジュシュリーである。またこの漢訳には否定辞が欠けている。

また、この「相互に縁となるもの (anyonyapratyaya)」と縁起の関係については、『シャーリスタンバ・ストラ』の次の一節が参考になる。『プラサナパダー』の引用を挙げておく。Pp: 「このように、この十二支の縁起は、互いに原因となり互いに条件となるものである。常住でもなく無常でもなく、有為でもなく無為でもなく、……無始時來生起しており、川の流れるように、途切れることなく継起している」 evam ayaṃ dvādaśāṅgaḥ pratīyasamutpādo 'nyonyahetuko 'nyonyapratyayo naivānityo na nityo .... 'nādikālapravṛtto 'nucchinno 'nupravartate nadīrotavat. (566.3-6) Cf. ŚS p.57, sec.30.

<sup>146</sup> Ch1: 爲諸識行其慧之行、諸行澹泊不有所由則無所處。Ch2: 若無明不和合諸行因緣則不起諸行。Ch3: 不起無明不起世間行。若不起行是則不生。

<sup>147</sup> Tib: shin tu mi skye ba. Ch1: 永滅。Ch2: 畢竟滅。Ch3: 常不生。Cf. KP sec.104: 「その種姓は究極的な不生であり不滅である」 akṣayaṃ tad gotra atyantatānutpannaṃ (Tib: rigs de ni gtan du mi skye ba'i phyir mi zad pa'o).

くないものもまた、正しいのですか ←148」

〔Mが〕言う。「良家の子よ、それもまた正しい。それはなぜかといえば、<sup>149</sup>→ このように、あらゆる言葉は自在だからです。←<sup>149</sup> <sup>150</sup>→ 場所にあるもの (\*deśastha) でもなく、方位にあるもの (\*pradeśastha) でもありません。←<sup>150</sup> 自在であり、場所にもなく方位にもないものは、非存在なのであるから、正しいのです。それゆえ、すべての言葉は正しいと言われるのです。デーヴァグッタによって語られた言葉と、如来によって語られた言葉と、その二つの言葉には区別がありません。それはなぜかといえば、すべての言葉は如来の言葉だからです。すべての言葉は真如を出ることはありません。分別 (分析的知) の手段となる言葉は [P74a] すべて無分別であるから、分別 (分析的知) となるのです。それゆえ、すべての言葉は文字と同じであるから、文字は平等であるから、[文字は思念がないから、]<sup>151</sup> 文字は空であるから、すべての言葉は平等なのです」

サマターヴィハーリンが言う。「マンジュシュリーよ、如来は、<sup>152</sup>→ <聖人 (\*ārya) の言葉による表示 (\*vyavahāraprajñpti) と聖人ならざる人 (\*anārya) の言葉による表示> ←<sup>152</sup> ということを仰らなかつたでしょうか」

〔Mが〕言う。「良家の子よ、文字によって聖人たちは言葉を表示するが、それらの同じ文字によって、聖人ならざる人たちもまた言葉を表示するのです」

〔Sが〕言う。「マンジュシュリーよ、その通りです」

〔Mが〕言う。「いったい、それらの文字は、聖人であるとか聖人でないとかを理解するのでしょうか」

〔Sが〕言う。「そんなことはありません」

〔Mが〕言う。「それらの文字が理解することなく、分別することないように、聖人たちは、あらゆる理解・分別を離れています。彼らには言語活動 (\*vyavahāra) はありません。聖人たちは、文字を考へること (文字想) によって、言葉 (\*vyavahāra) を表示すること (\*prajñpti) はしません。法を考へること (法想) によつても [言葉を表示すること] なく、<sup>153</sup>→ 我を考へること (我想) によつても [言葉を表示すること] なく、他を考へること (他想) によつても [言葉を表示することは] ありません ←<sup>153</sup>。たとえば、<sup>155</sup>→ 鼓 (\*tūrya)<sup>154</sup>、太鼓 (\*dundubhi)、杖鼓

<sup>148</sup> Ch1:其所言者虚妄響像亦誠諦乎。Ch2, 3:虚妄言説亦眞實耶。

<sup>149</sup> Tib: 'di ltar ngag thams cad ni dbang du gyur pa ste. Ch1: 已得自在。Ch2, 3: 是諸言説皆爲虚妄。Tib の dbang du gyur pa (\*vasībhūta) は、Skt では「臣従する、支配下に置かれる」の意であるが、パーリ語 (vasībhūta) では逆に「支配する、従える」の意味をもつ。Skt 仏教文献では阿羅漢の同義語に用いられ「自身をコントロールできている (漢訳: 自在)」という意味で用いられる。Ch2, 3 に見られる「虚妄」の原語は abhūta だったかもしれない。

<sup>150</sup> Ch1: 皆無處所而無所立 Ch2, 3: 無處無方。Cf. Sṣp: 「真如は場所にあるものでもなく方位にあるものでもない。そのように私は如来を見る」 na tathatā deśasthā na pradeśasthā, evaṃ tathāgatam paśyāmi. (341.7-8) VKN: 「菩提とは場所にあるものでもなく方位にあるものでもなく、正しいとか正しくないとかを離れているものである」 na deśasthā na pradeśasthā bodhiḥ sthānāsthānavigatā. (ch.3 sec.52)

<sup>151</sup> Ch2 のみ。

<sup>152</sup> Ch1: 賢聖言辭無賢聖辭。Ch2: 凡夫語言賢聖語言。Ch3: 凡夫語賢聖語。阿含經典における直接の出典は不明だが、『長阿含経』『結集経』に、シャーリプトラが伝える仏陀の教説の中に4組の「非聖人語 (anariyavohāra) と聖人語 (ariyavohāra)」に関する教えがあり (DN III 232.5-21)、これを踏まえたものと思われる。Cf. AN II 246.3-22, IV 1-12.

<sup>153</sup> Ch1: 無有人想。Ch2: 不以衆生相。Ch3: 非衆生想。

<sup>154</sup> Tib: sil snyan. この語は Skt. tūrya の訳語として定着しているが、チベット語では「シンバル」のこと。Mvy 5021

(両面太鼓\**mṛdaṅga*), ほら貝 (\**śaṅkha*) など<sup>←155</sup>が条件となって音は生じますが, それら〔の個々の楽器〕は, 分別することがないように, ちょうどそのように, 聖人たちは, 条件による生起を見るがゆえに, 言葉を表示することに執着することも固執することもしません」

## (XXI-2)

その時, サマターヴィハーリン菩薩は, マンジュシュリー法王子に, 次のように言った。「マンジュシュリーよ, 世尊は, このように,<sup>156</sup>『集まって坐っている比丘たちにはすべきことが二つある。法の話 (\**dhārmī kathā*) をしなければならぬことと, 聖なる沈黙 (\**ārya-tūṣṇībhāva*) に住しなければならぬことである』<sup>←156</sup>と仰ったが, そのうち, マンジュシュリーよ, 法の話とは何ですか。聖なる沈黙とは何ですか」

〔マンジュシュリーが〕言う。「話をする事によって, 仏陀に違ふことなく, [P74b] 法に違ふことなく, 僧伽に違ふことがなければ, それが法の話です。仏陀はまさに法であると信解すること, 法は貪欲から離れることであると信解すること, 僧伽は無為であると信解すること, これが聖なる沈黙です。

(1) また, 良家の子よ, 四念処 (\**catvāri smṛtyupasthānāni*) に関して話をする事, これが法の話です。すべての法を憶念することなく, 精神集中 (\**manasikāra*) することなきこと, これが聖なる沈黙です。(2) 四正勤に関して話をする事, これが法の話です。平等性によって, 平等であるとも考えず, 不平等であるとも考えないこと, これが聖なる沈黙です。(3) 四神足に関して話をする事, これが法の話です。身・口・意において努力しないこと, これが聖なる沈黙です。(4) 五根と五力に関して話をする事, これが法の話です。誰をも信じず<sup>157</sup>, いかなる法をも信じないで, すべての法を取ることもなく捨てることもなく, 分析的に理解 (\**pravicaya*) すること, これが聖なる沈黙です。憶念 (\**smṛti*) と一心 (\**ekāgra*) と無思量 (\**amananā*) とに住して,<sup>158</sup> すべての法は自性として確定している (\**samāhita*)<sup>←158</sup>と信解することと戯論のあらゆる拠り所に拠らないことの機縁 (\**pratyaḥ*) になること, これが聖なる沈黙です。(5) 七覚支に関して話をする事, これが法の話です。無関心 (\**upekṣā*) によって, 付託的思惟 (\**samāropa*) のないことを得て, 否定する (\**nirākaraṇa*) ことなく放棄 (\**nikṣepa*) ことなく住すること, こ

では漢訳を「鏡」としている。tūrya は, 本来は楽器一般を表すことば。

<sup>155</sup> Ch1:伎樂及與太鼓節奏之鼓。Ch2:鐘鼓。Ch3:鼓螺。

<sup>156</sup> (1) *Ud* : sannisinnānaṃ sannipatitānaṃ vo bhikkhave dvayaṃ karaṇīyaṃ: dhammiyā vā kathā, ariyo vā tuṇhībhāvo. (31.15-17) (2) *Ud* : sannipatitānaṃ vo bhikkhave dvayaṃ karaṇīyaṃ: dhammikathā, ariyo vā tuṇhībhāvo. (11.18-19) (3) *MN*: sannipatitānaṃ vo bhikkhave dvayaṃ karaṇīyaṃ: dhammī vā kathā, ariyo vā tuṇhībhāvo. (I 161.31-33) 藏訳には「坐って」の語があるので, 表現としては (1) が近い。他に *AN IV* 359.17-19 があるが, これは (3) と同形。ariya-tuṇhībhāva の単独の用例としては, *SN II* 273.11-17, *Thag v.* 650, v.999 などがある。(3) は「聖求経 (Ariyaparyesana-sutta)」の冒頭に観られるもので, 直後に「聖なる求め」と「聖ならざる求め」の二法が示され, 「聖なる求め」という経のテーマに入る。注釈によれば, この場合の「聖」は「聖者たちによる」あるいは「聖者たちになるための」の意。Cf. *Sīky*: 「ある家では施食を清浄にするであろうが, その家では, 座に坐して施食が清浄になるまで法に関する話をしなければならぬ, それから, 施食を受けて座から立ち, 出ていかなければならぬ」 yatra kule piṇḍapātaṃ śuciṃ kārayet tatra kule āsane niṣadya dhārmī kathā kartavyā / yāvan na sa piṇḍapātaḥ śucikṛto bhavet. tena piṇḍapātaṃ grhītvā utthāyāsanāt prakramitavyaṃ / (73.16-17) 蜜波羅 [2004]137 頁参照。

<sup>157</sup> Ch1:無聲不信於法。Ch2:不隨他語有所信。Ch3:不隨他語而有所信。

<sup>158</sup> Ch2:一切法常定性。Ch3:諸法自性清浄。

れが聖なる沈黙です。(6) 八聖道に関して話をする事、これが法の話です。[P75a] 筏のごときものと理解して法に依拠することなく、非法にも依拠することなく住すること、これが聖なる沈黙です。

<sup>160</sup>→ 良家の子よ、以上のように、これら〔(1) から (6) まで〕の三十七菩提分法というこれらの法について、語り、説明し、教示し、知らせめ、理解させ、解説し、注解し、明確にし、正しくあるがままに説き示すこと、これが法の話です。このように法が明らかになった場合、<sup>159</sup>→ 身体と別のものとして法を見ることなく、法と別のものとして身体を見ることもなく、二を見ることなく不二を見ることがないというふうに見る、そのように見て目の当たりに知恵 (\*jñāna) を見るけれども、見ることはない。<sup>←159</sup> 見ることがないこと、これが聖なる沈黙です。<sup>←160</sup>

また、良家の子よ、我を増益 (\*samāropa) すること、他を増益すること、法を増益すること、<sup>161</sup>→ 非法を増益すること<sup>←161</sup>によって話をする事はしない、これが法の話です。不可説の法を得ることで、すべての文字・言葉・声・音から離れて不動〔の境地〕を獲得し、遠離 (\*viveka) を自性とする心によって抑制 (\*upasaṃhāra) に住すること、これが聖なる沈黙です。

良家の子よ、すべての衆生の能力のすぐれているかどうか (\*varāvara) を理解して話をする事、これが法の話をする事です。もしある人が、精神集中に入って (\*samāhita) 〔心が〕散乱することがなければ、その人たちは聖なる沈黙に住しているのです」

### (XXI-3)

その時、偉大なサーラ樹の如き婆羅門の子であるサマターヴィハーリンがマンジュシュリー法王子にこう言った。「マンジュシュリーよ、あなたが語ったことの意味を私が理解したことによれば、声聞や独覚たちには法の話と聖なる沈黙はありません。それはなぜかといえば、[P75b] 彼らは能力の優劣を知ること巧みではなく、常に精神集中に入っているわけではないからです。マンジュシュリーよ、<誰が法を語る人だろうか、誰が聖なる沈黙に住する人だろうか>と真実の言葉によって語るのであれば、その人は如来であると真実の言葉によって語ろう。それはなぜかといえば、仏陀・世尊は、すべての衆生の能力に通じておられ、常に精神集中に入っておられるからです」

その時、世尊は、マンジュシュリー法王子に次のように仰せになられた。「マンジュシュリーよ、良家の子であるサマターヴィハーリンが語った通りである。<sup>162</sup>→ このように、諸仏・世尊はお考えになる<sup>←162</sup>」

<sup>159</sup> [引用] 『般若灯論』 (Prajñāpradīpa)

[Tib]: de'i phyir / (AVP: 'phags pa tshangs pas zhus pa'i mdo las) lus las gzhan pa'i chos mi mthong la / chos las gzhan pa'i lus mi mthong ste / ji ltar gnyis ma yin pa dang / gnyis ma yin pa ma yin pa de ltar mthong ngo // de ltar mthong bas mngon sum nyid du mthong ba yang mi mthong ngo // ( zhes bya ba la sogs pa gsungs pa de dag grub pa .... // ) (Pra Peking ed. dBu-ma Tsha 170b1-3 ; AVP Peking ed. dBu-ma Zha 283a3-4-7)

[Ch]: 如 梵天王問經 中偈曰。離身不見法。離法不見身。不一亦不異。應當如是見。( Taisho vol.30 86c9-11)

<sup>160</sup> [引用] 『大乘掌珍論』

[Ch]: 如契經言。於三十七菩提分法如佛所說如實開示是名說法。復於是法雖以身證而不觀察離身有法。亦不觀察離法有身。如是觀察謂觀無二亦無不二。如是觀時不隨觀察現量智見。不觀察故名聖默然。(Taisho vol.30 277b3-8)

<sup>161</sup> Ch1, 2 はこの一節を欠く。Ch3 は更に「非非法妄想」を加える。

<sup>162</sup> Ch1: 諸佛世尊乃能了耳。Ch2, 3: 唯諸佛如來有此二法。

## (XXI-4)

その時、長老(\*sthavira) スプーティが世尊に対してこう申し上げた。「私は世尊から直接聞き、直接受持致しました。『集まって坐っている比丘たちにはすべきことが二つある。法の話をしなければならないことと、聖なる沈黙に住しなければならないことである』と〔世尊は〕仰いましたが、世尊よ、もしこの〔二つの〕あり方に声聞が耐えられないならば、如来が声聞たちに向かって、『法の話をしなさい』とか、『聖なる沈黙に住しなさい』と〔仰った〕この意味をどのように説明なさいますか」

世尊が仰せになられた。「スプーティよ、このことをどう考えるか。声聞たちは〔他から〕聞くことなくして、法の話をするだろうか。聖なる沈黙の専心に住するだろうか」

〔スプーティが〕申し上げる。「そのようなことはありません」

世尊が仰せになる。「スプーティよ、それゆえ、このように声聞と独覚とには法の話もなく、聖なる沈黙もない、と理解しなければならない」

その時、マンジュシュリー法王子が、具寿(\*āyusmat) スプーティに対してこう言った。「スプーティよ、[P76a] 如来は、衆生たちの八万四千の〔心の〕活動(caryā)をご存知ですが、長老(\*sthavira) はそれを知っていますか。説く相手にふさわしい法の話をしなければなりません。そういう相手に応じた説法をしなければならないということに、長老の知は働いているでしょうか」

〔スプーティが〕言う。「マンジュシュリーよ、そういうことはありません」

マンジュシュリーが言う。「長老スプーティよ、ある三昧に住すれば、すべての衆生の心の活動を見、自らの心と他者の心とに関して無礙となりますが、〔長老は〕すべての衆生の心を見るそのような三昧に入っていますか」

<sup>163</sup>→〔スプーティが〕言う。「マンジュシュリーよ、そのようなことはありません」

マンジュシュリーが言う。「大徳(\*bhadanta) スプーティよ、如来は、衆生たちの八万四千の〔心の〕活動のそれぞれに応じて(\*yathāpratyarham) 薬を処方することによって、法の話なさいます。精神集中・平等性の中にあつて、動揺することなく、すべての衆生たちの八万四千の心の活動をご存知です。<sup>163</sup>大徳スプーティよ、それゆえ、このように、ここには声聞と独覚たちの領域はないと理解しなければならないのです。大徳スプーティよ、貪欲の行いをしている衆生の中には、美しい外形〔を見ること〕によって解脱し、醜い外形によっては解脱しない人がいますが、如来は彼らのことをもご存知です。瞋恚の行いをしている衆生の中には、欠点を見ることによって解脱し、慈心によっては解脱しない人がいますが、如来は彼らのことをもご存知です。愚痴の行いをしている衆生の中には、叱責(\*nindā)<sup>164</sup>によって解脱し、説法によっては解脱しない人がいますが、如来は彼らのことをもご存知です。<sup>165</sup>→〔貪欲・瞋恚・愚痴の煩惱を〕等しい割合で行っている衆生<sup>165</sup>は、美しい外形によっても解脱せず、醜い外形によっても[P76b]解脱せず、慈心によっても解脱せず、欠点によっても解脱せず、説法によっても解脱せず、叱責によっても解脱しないことがあります。彼らに対して如来は、平等性によって、〔彼らの〕能

<sup>163</sup> Ch3 ではこの部分が重複して訳されている。

<sup>164</sup> Tib:smad pa. Ch1:講説. Ch2, 3:不共語.

<sup>165</sup> いわゆる「等分衆生」のこと。五島[2009]148頁、注37参照。

力の範囲内で解脱するようと、そのように法を説かれます。如来は彼らのことをもご存知なのです。スプーティよ、それゆえ、このように、如来は説法者の中で最高の人なのであり、禪定者の中で最高の人なのであり、聖なる沈黙を喜ぶ人たちの中で最高の人なのである、とそのように理解しなければなりません」

## (XXI-5)

その時、具寿 (\*āyusmat) スプーティがマンジュシュリー法王子に次のように言った。「マンジュシュリーよ、もし声聞と独覚とが法を語ることができず、聖なる沈黙に住することができないのであれば、誰であれ、このような功德をもつ菩薩に対して、どのようにして、法の話をし、聖なる沈黙に住するのでしょうか」

マンジュシュリーが言う。<sup>166</sup>「大徳スプーティよ、如来はこのことに通達なされ、ご存知ですから、如来の知によって、このことを尋ねなさい」<sup>←166</sup>

その時、世尊は、具寿スプーティに次のように仰せになられた。「スプーティよ、<すべての仏陀の法に入っても動揺することのない心><sup>167</sup>という三昧がある。その三昧を得た菩薩たちは、すべて、これらの功德を持つであろう」

その時、マンジュシュリー法王子は、サマターヴィハーリン菩薩に次のように言った。「良家の子よ、八万四千の〔衆生の心の〕活動と〔それに対応した〕八万四千の法の集まり (\*dharmaskandha) を説くこと、これが法の話と言われます。想と受とが滅尽した [P77a] 三昧が、聖なる沈黙です。良家の子よ、私は一劫あるいは一劫以上に渡って、法の話と聖なる沈黙に関して説明したとしても、私のひらめきに基づく説法 (\*pratibhāna) は尽きることはないでしょう」

## (XXII-1)

その時、世尊は、偉大なサーラ樹の如き婆羅門の子であるサマターヴィハーリンに次のように仰せになられた。「良家の子よ、かつて、過去時に、アサンケーヤ (阿僧祇) よりもはるかに長く、無量、広大、無辺の劫をさかのぼって、『名聞 (\*Kīrtiviśruta 名声の知られた)<sup>168</sup>』という劫があり、その時、その時代に、『喜見 (\*Priyadarśana 見る人が喜ぶ)』という世界に、『普光 (\*Samantaprabha 周囲いっぱい光)』という如来・応供・正等覺・明行足・善逝・世間解・調御丈夫・無上士・天人師・仏陀・世尊が、世に現れた。普光如来・世尊の喜見世界は、あらゆる宝石で散りばめられ、繁榮し、裕福であり、安樂であり、食糧が豊富で、喜ばしく、天人と人間で満ち溢れている。その世界はあらゆる香で香りづけられ、触ると綿 (\*tūla) のように柔らかく、触るとカーチャリンディカ衣 (\*kācalindika)<sup>169</sup>のように心地よく、七種の宝石であまねく飾られている。

その喜見世界には、四コーティ [もの数の] の四大陸 (\*catvāri dvīpāni) があり、それぞれ〔の

<sup>166</sup> Ch1:如来明其所知靡不通達. Ch2, 3:唯佛當知.

<sup>167</sup> Ch1:入一切音整其亂心. Ch2, 3:入一切語言心不散亂.

<sup>168</sup> Tib:snyan pa rnam par grags. Ch1, 2:名聞. Ch3:名稱.

<sup>169</sup> 五島 [2011]212 頁, 注 105 参照.

大陸)は、八万四千ヨージャナの広さがある<sup>170</sup>。[そこにある]それらの大都市(\*mahānagara)はすべて、あらゆる宝石によって飾られ、一ヨージャナの大きさに作られている。それぞれの大都市では、五百もの村(\*grāma)、山窟(\*parvatakandara)、国(\*rāṣṭra)、市場(\*nigama)が[その周りを]取り囲んでいる。すべての村、[P77b]町(\*nagara)、市場、国(\*janapada)には、十万もの数多くの人(\*prāṇin)たちが住んでいる。[そこにいる]それらの人々の眼の前に見えるすべてのものは、好ましく、心地よく見え、心地よくないものは見えない。それらの人々は、仏陀を憶念する(\*buddhānusmṛti)三昧を獲得している。それゆえ、その世界は『喜見』と言われるのである。他の仏国土からその喜見世界にやって来た菩薩たちは、世界を見る場合、他の仏国土では、『喜見』[世界を見る]ほどには、喜ぶことはないのである。また、その普光如来は、<sup>171</sup>→三乗に関して、衆生に法を説くのである←<sup>171</sup>。多くの場合、『良家の子よ、汝は、このように、この二つの住に住しなさい。法の話をしなさい。また、聖なる沈黙・寂靜に住しなさい』と詳細に正しく教示するのである<sup>172</sup>。

<sup>170</sup> Tib:re la yang gling chen po dpag tshad brgyad khri bzhi yod de. Ch1:一一四域三百三十六萬里. Ch2, 3:一一天下縱廣八萬四千由旬. 蔵訳は「それぞれ〔の島 \*dvīpa〕には、また、八万四千ヨージャナの大きな島がある」と読む。

<sup>171</sup> Ch1:説三乗教爲諸聲聞講説經法. Ch2, 3:以三乘法爲弟子説.

<sup>172</sup> この仏陀の言葉は次の第五卷冒頭に続き、普光如来が、他方仏国土から来訪してきたアクシャヤマティ(Akṣayamati, マンジュシュリーの前生)とヴィシェーシャマティ(Viśeṣamati, サマターヴィハーリンの前生)の二人に対して「法の話」と「聖なる沈黙」の教えを説いたことを明らかにする。なお、ヴィシェーシャマティは第一卷冒頭では「十六正土」の一人としてその名が挙げられている。

<一次文献・略号> (校訂テキストまたは西藏大蔵経, 大正大蔵経)

- Adsp*      *The Gilgit Manuscript of the Aṣṭādaśasāhasrikāprajñāpāramitā*, Chapters 55 to 70, Corresponding to the 5th Abhisamaya, edited and translated by Edward Conze, Serie Orientale Roma 26, Roma, 1962.
- AN*        *Aṅguttara-Nikāya*, 5 vols, PTS., London, 1885-1900.
- Asp*        *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*, Edited by P. L. Vaidya, Buddhist Sanskrit Texts(BST) No.4, Darbhanga, 1960.
- AVP*        *Avalokitavrata's Prajñāpradīpaṭīkā*, Tib: Shes rab sgron ma rgya cher 'grel pa, Otani No.5259, Tohoku No.3859.
- Bcvp*        *Bodhicaryāvatāra Pañjikā : Bodhicaryāvatāra of Śāntideva with the Commentary Pañjikā of Prajñākaramati*, Edited by P. L. Vaidya, BST No.12, Darbhanga, 1960.
- Bhk*        *Bhāvanākrama : Minor Buddhist Texts Part III Third Bhāvanākrama*, Giuseppe Tucci(ed.). Serie Orientale Roma XLIII, Roma, 1971.
- Bodhis*      *Bodhisattvabhūmi*, U.Wogihara (ed.), Tokyo, 1930-36.
- BP*        *Brahmaviśeṣacintipariṣchā*.
- DN*        *Dīgha-Nikāya*, 3 vols, PTS., London, 1889-1910.
- Gv*        *Gaṇḍavyūhasūtra*, edited by P. L. Vaidya, BST No.5, Darbhanga, 1960.
- JĀA*        *Jñānālokālaṃkāra, Transliterated Sanskrit Text Collated with Tibetan and Chinese Translations*, edited by Study Group on Buddhist Sanskrit Literature, The Institute for Comprehensive Studies of Buddhism, Taisho University, 2004.
- KP*        *Kāśyapaparivarta*, A. von Staël-Holstein (ed.), Shanghai, 1934; *The Kāśyapaparivarta Romanized Text and Facsimiles*, M.I. Vorobyova-Desyatovskaya (ed.), Tokyo, 2002.
- Krp*        *Karuṇāpuṇḍarīka*, edited with Introduction and Notes by Isshi Yamada, Vol.II, London, 1968.
- Laṅk*        *Saddharmalaṅkāvatārasūtra*, edited by P. L. Vaidya, BST No.3, Darbhanga, 1963.
- MA*        *Madhyamakāvatāra of Ācārya Candrakīrti, Root text along with the Autocommentary [Chapters 1-5]*, Restored into Sanskrit, translated into Hindi and Critically edited Tibetan text by Dr. Tashi Tserin, Varanasi, 2005.

- MM* *Māñjuśrīmūlakalpa*, BST No.18, Darbhanga, 1964.
- MN* *Majjhima-Nikāya*, 3 vols, PTS., London, 1887-1902.
- MSg* *Mahāyānasamgraha* : 佐々木月樵『漢譯四本對照・攝大乘論・附西藏譯攝大乘論』改訂新版, 臨川書店, 1977年.
- Pp* *Madhyamakavṛttiḥ, Mūlamadhyamakakārikās de Nāgārjuna avec la Prasannapadā Commentaire de Candrakīrti*, par Louis de la Vallée Poussin, St.Pétersburg, 1913.
- Pra* *Prajñāpradīpa*, Tib: dBu ma'i rtsa ba' i 'grel pa shes rab sgron ma, Otani No.5253, Tohoku No.3853, Ch: 『般若燈論釋』 Taisho No.1566.
- Śikṣ* *Śikṣāsamuccaya*, edited by P. L. Vaidya, BST No.11, Darbhanga, 1961.
- ŚS* *The Śālistamba Sūtra*, Edited by N. Ross Reat, 1993, Delhi.
- SN* *Samyutta-Nikāya*, 5 vols, PTS., London, 1884-1898.
- SP* *Saddharmapuṇḍarīkasūtra*, Kern and Nanjio (eds.), St.Pétersburg, 1912.
- SP(TD)* *Saddharmapuṇḍarīkasūtram Central Asian Manuscripts Romanized Text*. Edited by Hirofumi Toda, Tokushima Kyoiku shuppan Center, 1983.
- Sśp* *Saptaśatikā Prajñāpāramitā*, edited by P. L. Vaidya, BST No.17, Darbhanga, 1961.
- SS* *Nāgārjuna's Sūtrasamuccaya : A Critical Edition of the mDo kun las btus pa*, Edited by Bhikkhu Pāsādika, 1989, Copenhagen.
- Thag* *Thera- and Therī-gāthā*, PTS., London, 1883.
- Ud* *Udāna*, PTS., London, 1885.
- VKN* *Vimalakīrtinirdeśa, Transliterated Sanskrit Text Collated with Tibetan and Chinese Translations*, edited by Study Group on Buddhist Sanskrit Literature, The Institute for Comprehensive Studies of Buddhism, Taisho University, 2004.

<二次文献・略号> (辞書・索引類)

- AD* *The Practical Sanskrit-English Dictionary*, by Prin. Vaman Shivaram Apte, Revised & Enlarged Edition, Kyoto, 1978 (臨川書店).
- BHSD* *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary, Volume II: Dictionary*, by Franklin Edgerton, New Haven, 1953; reprint Delhi, 1970.
- Mvy* *Mahāvvyutpatti* : 『梵藏漢和四譯對校・翻譯名義大集』鈴木學術財団, 1916.

## ＜三次文献＞（論文・著書）

- 桂 紹隆 [2011]: 「インド仏教思想史における大乘仏教—無と有の対論」『シリーズ大乘仏教 1 大乘仏教とは何か』, 253-288 頁, 春秋社
- 五島清隆 [2003]: 「チベット訳テキスト校訂と写本大蔵経—『思益梵天所問経』を中心に—」『印度學佛教學研究』 #52-1, (53)-(57) 頁.
- [2009]: 「チベット訳『梵天所問経』—和訳と訳注(1)」『インド学チベット学研究』 #13, 141-184 頁.
- [2010]: 「チベット訳『梵天所問経』—和訳と訳注(2)」『インド学チベット学研究』 #14, 89-125 頁.
- [2011]: 「チベット訳『梵天所問経』—和訳と訳注(3)」『インド学チベット学研究』 #15, 196-230 頁.
- 斎藤 明 [2011]: 「観音（観自在）と梵天勧請」『東方學』 #122, 1-12 頁.
- 下田正弘 [1996]: 「<さととり>と<救い>—インド仏教類型論再考」『宗教研究』 #70-1, 25-46 頁.
- [1997]: 『涅槃経の研究 大乘経典の研究方法試論』 春秋社.
- 袴谷憲昭 [2000]: 「pramāṇa-bhūta と kumāra-bhūta の語義: bhūta の用法を中心として」『駒澤短期大學佛教論集』 #6, 328-299 頁.
- 平川彰 [1995]: 「マンジュシュリー法王子と一生補処」『印度哲学仏教学』 #10, 1-20 頁.
- 蜜波羅鳳洲 [2004]: 『梵藏漢対照 宝聚経』 山喜房佛書林.
- Harrison, Paul [1990]: *The Samādhi of Direct Encounter with the Buddhas of the Present, An Annotated English Translation of the Tibetan Version of the Pratyutpanna-Buddha-Saṃmukhāvasthita- Samādhi-Sūtra*, Studia Philologica Buddhica Monograph Series V, The International Institute for Buddhist Studies, Tokyo.

## An Annotated Japanese Translation of the Tibetan Version of the *Brahmapariṣcchā* (4)

### Summary

In the fourth *bam po* (volume) of the *Brahmapariṣcchā*, several new characters appear. They are Mañjuśrī, the *kumārabhūta*, and the *brāhmaṇa* Samatāvihārin. The former was mentioned as seated in the assembly from the first *bam po* but he has kept silent in the first three *bam pos*. Jālinīprabha, the *kumārabhūta*, who has been taking the role of answerer, disappears in the last three *bam pos*. Samatāvihārin asks the Buddha: “Who is a *bodhisattva*?” The Buddha answers: the *bodhisattva* is the one who makes a vow to save the sentient beings who are determined to follow the wrong path (*mīthyātvaniyata*), but not for the sake of those who are determined to follow the correct path (*samyaktvaniyata*), nor for those who are indeterminate (*aniyata*). This definition is very important in the history of interpretation of the *bodhisattva* vow. Hearing this definition, thirty-two *bodhisattvas*, through inspired eloquence (*pratibhāna*), one after another describe who a *bodhisattva* is in connection with their respective names.

In the dialogue between Mañjuśrī and Samatāvihārin, there are important passages such as “the essence of the self (*ātman*) is the essence of the buddha” and “to see the self (*ātman*) is to see *dharma*, and by seeing *dharma* one sees the *tathāgata*”. It seems that these passages mean to identify the self with the buddha / *tathāgata*. But we understand that the Sūtra emphasizes the importance of cultivating wisdom to find out the true self, judging from the following explanation: as those who are skillful at classifying genuine gold have obtained the skill to discern the good from the bad by observing the bad carefully, just so one purifies one’s eyes to see wisdom by seeing the self.

Referring to the Buddha’s sermon: “When sitting in the meeting, monks have two things to do. One is exposition of teachings (*dhārmī kathā*) and the other is holy silence (*ārya-tūṣṇībhāva*)”, Samatāvihārin asks Mañjuśrī what these two things really are. The resulting dialogue between the two *bodhisattvas* makes clear the difference between Traditional Buddhism and Mahāyāna Buddhism. The Buddha in this connection reveals that a long time ago the former Buddha named Samantaprabha also gave a similar sermon. The fourth *bam po* suddenly stops narrating that episode at its introduction and the further description of the episode will reappear in the next (fifth) *bam po*, where the Buddha declares that two *bodhisattvas* who at that time were Akṣayamati and Viśeṣamati are now Mañjuśrī and Samatāvihārin, respectively.

<キーワード> Mañjuśrī (文殊), Samatāvihārin (等行), Subhūti (須菩提), 菩薩 (*bodhisattva*), 自我 (*ātman*), 法の話 (*dhārmī kathā*), 聖なる沈黙 (*āryatūṣṇībhāva*)